

中等學校受驗者講習會編纂

257
693

中學校
實業學校
高等女學校

入學受驗者準備書

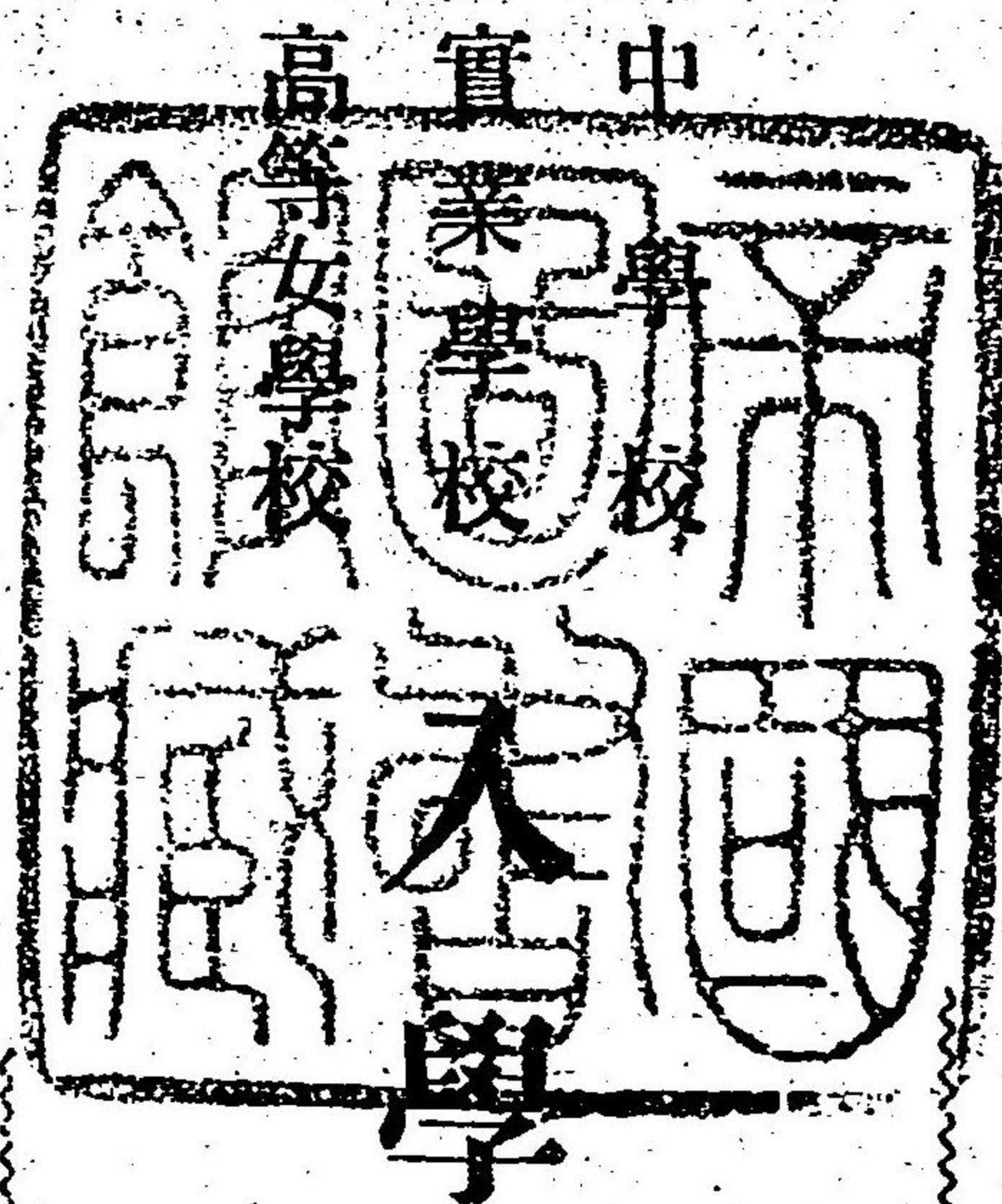
問題
解答

大阪
東京

一書堂發行

特23

861

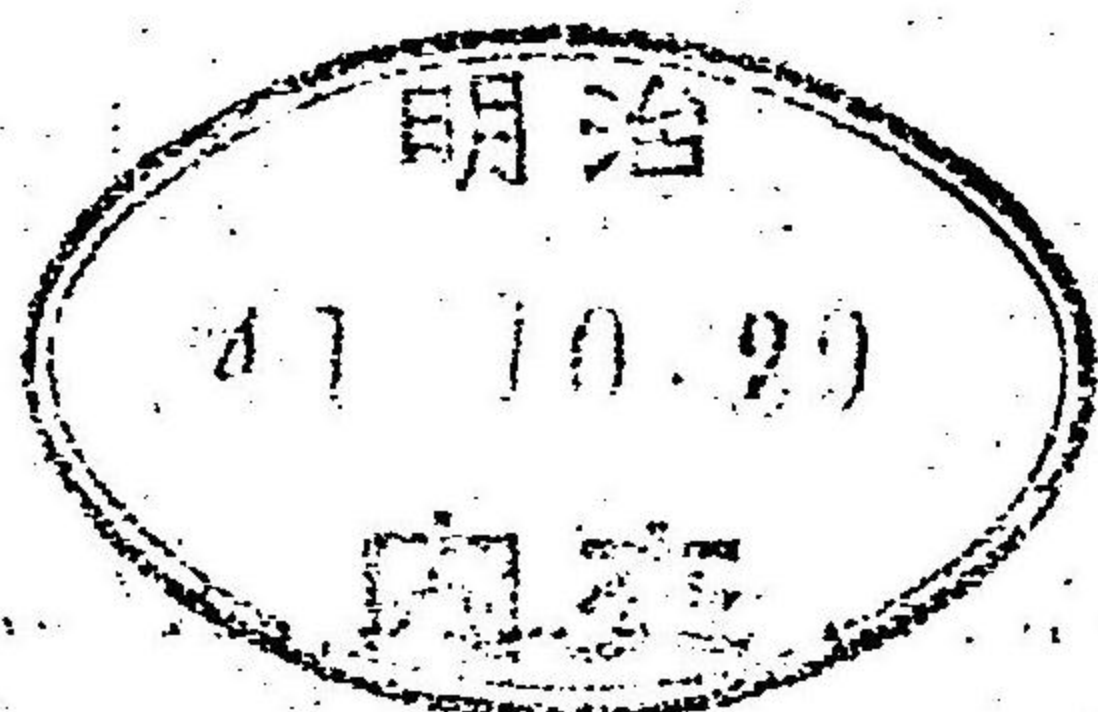


中等學校受驗講習會編纂

受驗者準備書
問題解答

大 阪
東 京

一 書 堂 發 行



緒言

本書は、中學校、高等女學校及び中等程度なる實業學校に入學せんとする者の爲め、編纂したる準備書なり。

されば、本會はこれがため、廣く各地の中學校、高等女學校、實業諸學校の入學試験問題を蒐集したるに共に、兼ねて、本會が實地講習の經驗と實施研鑽に鑑み、これを適當に排列し、充分應用力を養成するに足るべき練習事項を網羅し、秩序正しく記述せり。故に本書は、以上各學校の入學志願者にこり、準備的の獨修を爲し得べく、又、これに依りて準備的の指導を爲すの便に充てたれば、内容は、該試験の科目たる、國語と算術の二科目につき、専ら既修事項の練習材料と、兼ねて入學受験者の爲め諸種の心得を卷頭に附記したり。

かるが故に、入學志願者の爲め、最も適切なる好箇の参考書たるは
勿論、準備的示教用として必要缺くべからざらしめられたれば、獨習者
は、各章につき漏れなく繙讀したる上、從來學習したる事項と對照
して反覆練習し、指導者は、また之に依りて教科書と對照の上、勉め
て叮嚀懇切に志願者の頭腦を練るが如き、何れも充分咀嚼すべき
方法を必要とす。
要するに、本書を巧みに利用するの途を講じ、最後の勝を占められ
ん事を切望するは、豈編者のみに非るべし。

明治四十一年九月

編者識す

目次

第一編 國語科

第一章	講讀、書取、綴方……………	一
第二章	講讀、書取、綴方……………	九
第三章	講讀、書取、綴方……………	一五
第四章	講讀、書取、綴方……………	二二
第五章	講讀、書取、綴方……………	三一
第六章	講讀、書取、綴方……………	四一
第七章	講讀、書取、綴方……………	五二
第八章	講讀、書取、綴方……………	五八
第九章	講讀、書取、綴方……………	六五
第十章	講讀、書取、綴方……………	七二
第十一章	講讀、書取、綴方……………	七九
第十二章	講讀、書取、綴方……………	八六
第十三章	講讀、書取、綴方……………	九六
第十四章	講讀、書取、綴方……………	一〇四

第二編 算術科

第十五章	綴方作例……………	一一三
第一章	……………	一
第二章	……………	四
第三章	……………	一四
第四章	……………	二一
第五章	……………	二五
第六章	……………	二八
第七章	……………	三一
第八章	……………	三六
第九章	……………	五四
第十章	……………	五八
第十一章	……………	六二
第十二章	……………	七三
第十三章	……………	八四
第十四章	……………	九六
第十五章	……………	一〇一

目次

第十六章	一〇九
第十七章	一一四
第十八章	一二〇
第十九章	一二九
第二十章	一三三

算術科答解

第一章	一
第二章	一
第三章	二
第四章	五
第五章	七
第六章	八
第七章	一一
第八章	一四
第九章	一六

第十章	一九
第十一章	二四
第十二章	二四
第十三章	二六
第十四章	二七
第十五章	三一
第十六章	三二
第十七章	三四
第十八章	三七
第十九章	三九
第二十章	四三

目次終

入學受験者の心得

凡そ如何なる學校に入學することも、先づ「健全なる精神は健康の身體に宿る」といふことを忘れてはならぬ。然れば、志願の決心を起すに先づては、第一に身體の健康を保つ事に留意し、その上にて充分の學力の素養に勉め、以て自信力を養成し、決して人を依頼するなどのことなきを期し、己に克つ事を念じて、正々堂々の陣を張り、最後の勝利を得る方法を考へねばならぬ。唯一時の僥倖を頼み、若しくは運を天に任すなごころの場を瞞着するを、チヨットでも、思ふてはならぬ。

何をいふにも、全國の中等諸學校へ入學しやうと思ふものは、常に募集定員の五倍も六倍もあつて、志願者悉くが入學することは出来ぬ。従て、これ等志願者互に競争して、全く勝利を得やうとするには、並大抵の準備では不可なのである。即ち身體を攝養して

十二分の健康に堪へ得るやう心掛けなば勢ひ學科を學習しても面白く快活に覺ゆる事ができるから従つて素養も充分になり、自信力も慥かとなり卑怯の心が起らぬやうになる。これに反して、身體の攝養を怠りて健康を顧みないに、自然身體羸弱となり、何學科を學んでも不快の念のみ積り、遂には學習が嫌になつたる結果、素養が足りない所から、人を恃む念を生じ、愈試験となつたる曉は、知らず識らず卑劣の根性が起つて、失敗に終るものである。よし、萬一の僥倖を得て、入學したるとも入學後、満足に修學を仕遂ぐるに、この困難で、中途にして退學せざるを得ざる有様に立ち至るものだ。又、如何に身體健康なりとて勉強することをお忘れれば、少しの効力ないに、恰も身體羸弱なると同じ運命に遭遇せねばならぬ。故に、健康に次ぐに勉學復習を最も必要だといふことは、常に忘れてはならぬ。而して、この學習も平生から心掛けて、次第々々に進

ましむる方法を講ぜぬと不可ない。然るを世には、試験間際まで打ち捨て、顧みず、愈期日が迫るに俄かに思ひ出したかの如く、あわて、勉強にかゝり、夜さなく晝となく睡眠をも廢して、非常に復習する者がある。斯くては、唯々身體を疲勞せしむるのみで、良好の成績を得ること難く、却て肝腎の當日に至つて、精神呆然となり思はぬ不覺を招くことが多いから、斷じて試験學問とか俄勉強とかは避ける様吳々も留意するがよい。幸ひにして、何の故障なく合格したりして、いざ入學の後に至り、一時の安心が結局禍となり、素養ある者には打ち勝たれず、何時かは化の皮を現すのみならず、最後迄試験度毎に苦心する階梯となるから、よく注意するがよい。

故が、入學志願者が競争に打ち勝ち、その入學の目的を達せやうとならば、これ等に對し、夫々用意がなくてはならぬ。この用意こそ

先づ入學試験に應ずる丈の試験科目を十分學習して置かなければならぬ。偕て學科目の重なるは、國語と算術であるから、この二科目は尋常科で習つたことから高等科に於て修めたことを、反覆復習して、讀方も講釋も綴方も計算も、十分記憶が出来る様にせねばならぬ。本書は則ちその記憶を丁寧復習の便に供せん爲めに外ならぬもので、各科練習上の注意要項を述べて置かう。

一、國語科は讀書力を養成し、文章を熟達せしむる爲めの目的であつて、更にこれを講讀、書取、綴方、書方の四科に分つてあ

二、講讀は第一發音を明瞭にし、解釋は正確に文字の意義と全文の大意を能く表はすことにつとめ、かの方言、訛言の如きは、つとめて避くることに注意せねばならぬ。又、これをその儘筆にて解答することを練習し置かねばならぬ。

三、書取は、文字を正確に記し、一點一畫も誤らざる様、特に類字

瓜と爪、釘と針の如しに注意せねばならぬ。されば本書は類字及び假名を漢字に改め、又は、漢字の讀方に就き、悉くその上欄に示し置きし故、練習の際には、篤く参照するがよい。

四、綴方は、常に讀本その他の書物で讀むた事を覺悟して置き、題に應じて、先づ大体に於ける記述の順序を胸の内定めて、然る後、筆を執つてスラ／＼と記述し、終つてからも再三再四讀んで見たる上、その文の缺點を見出して幾度も改作する様にせば、自然文章の上達することは疑ひを容れぬ所である。

五、書方は、本書に示さゞれども、平生注意して嚴正に書く癖をつけて置かねばならぬ。

六、算術科は、數字を明瞭に書き、計算を敏速にし、譜算に習熟す

る等のここが第一の要件である。故に本書は、練習問題を多くして懇切なる解式を加へ、尙、その上欄に於て、夫々注意事項を記述して、十分練習に意を用ゐたれば、何れも参照するがよい。

七、

尙、算術科は、常に應用力を養成することにつとめ、同時に、日常の計算に就き、見たる事聞きし事は周到の注意を拂ひ、大凡その標準を知り置く必要がある。斯くせば、問題の答を出す前に於て、概算することが出来るのである。例へば米一升の價を出す時に於て、常に注意して居れば、其の大凡と廿錢前後のものであるといふ事が分かるから、大間違ひの位は取りをする様な事がない。又、一度計算したりとも、誤りがない事とも限らぬから、再三、檢算を行ふ習慣を作らねばならぬ。

八、

尙、解式の書方を粗末にする結果、往々、飛んでもない間違ひを來す虞があるから、よく注意が肝要である。例へば等號即ち(=)に就き、簡略に用ふる所から、下の如き間違ひが起る。

$$5+4=9+1=10$$

とする類である。

$$5+4=9$$

とすべきを單に

斯くの如くにして、試験に應ずる準備が出來て仕舞へば、いよゝ期日といふ數日前からは、一層身心共に靜平を保ち、悠然として受験するの覺悟が必要である。さてその當日ともなりぬれば、あわてず、さわがず、試験場に出頭するのだが、その際に於ける心得事項を左に述べやう。

- 一、宅を出る時は、受験必要品たる、白紙、毛筆(大小)、鉛筆、消護謨、硯、墨(この外に墨壺を用ひたくば別に携帯したりして差支なし)、小刀等を忘れぬ様にして、試験開始時刻前遅くも三十

分には登校し、指揮者に届け出でたる上、靜かに控所で待ち居るがよい。

二、いよく、試験が始めれば、落付き拂つて、問題を熟讀しその意味を考へ、然る後、答案を認むることが必要である。決して急いで周章てるには及ばぬ。

三、問題の意味を能く解釋し十分取り違へざるを見極めた後はゆるく、答案を認むると共に、認め終らば、次は、必ず再び讀んで見て、誤りはなきか、脱字はなきかと、調べて見る様にするがよい。

四、試験の際には、思つたより早く時間のたつものであるが、されば、こて、周章つるにも及ばず、要は、時間を利用して、遅れざる様、又、早く認め終りたりこて、時間の許す限りは、十分考へるがよろしい。

五、多くの問題の中には、易いものと、難しいものとのがあるから、先づ、易い方から書き終り、後、難しい問題を篤く考へる様にしない。案外の失敗を見る事がある。故に、問題の順序通り、必ずしも、書くに及ばず、唯、その番號を間違はせぬ様に付けて置けばよろしい。

六、試験場にては、餘所見をなし、又は、隣人と密談などすることは無論、一旦、就いた席は、答案を差し出す迄は、離れることは出来んから、豫め、入室の以前に、忘れ物のなき様にせねばならぬ。又、平素の勉強に依て、固く自分を信じ、決して、人を依頼するなどの卑劣心は起してならぬ。

七、答案に認むる文字は、極めて丁寧に書き、明瞭正確を保たねばならぬ。當字や曖昧の文字は、斷じて書かぬ事として、假名を用ゐるがよろしい。

八、答案の文章は、なるべく漢字を用ゐることとし、假名は平假名と片假名を混用してはならぬ。

九、答案用紙には、一枚毎に、その始めの下へ、自分の氏名と番號を書くものだから、必ず忘れてはならぬ。但し番號のみの所と氏名のみのあるから、この時は、萬事指圖通りにするがよい。

十、同じ科目の答案用紙が、一枚以上になつたときは、その紙の順番を正し番號をつけ、尙その始めの側に氏名をも書き紙擦で綴て出すがよい。(終)

中等學校 實業學校 高等女學校 入學受験者準備書

中等學校受験講習會編纂

國語科

第一編

第一章

第一節 講讀

左の文の讀み方および全文の意義を記せ。但し、附線の字句は、特に解釋せよ。

(1) 近畿地方は、早くより、開けて、代々の天皇のつねに、都を定めたまひたりし所なれば、歴史上の關係も、つこも深く、名所舊蹟はなほだ、多し。

答案の認め方

(イ) 近畿地方は、早くより、開けて、代々の天皇のつねに、都を

蹟………趾

定めたまひたりし所なれば、歴史上の關係、もつとも、深く、名所、舊蹟、はなはだ、多し。

(ロ) 畿内地方は、早くからひらけて、代々の天皇様が、いつも都どきめておゐでなさいました所であるから、歴史との關係は、とりわけ深ふて、名所舊蹟もなかく多い。

(ハ) 代々の天皇 ツギノ天皇ノコト
もつとも トリワケトイフコト

(2) されど、にはかのことゝて、兵器など備はらざりしかば、有り合せたる古槍、日本刀、獵銃などをとりて、勇ましくいでたちあるひは、哨兵となり、あるひは、傳令使となり、また、館内の婦女も、あるひは、炊事をつかさどり、あるひは、負傷者を看護し、あるひは、防禦工事に用ふる土囊を縫ひなどして、かひがひしくたち働きたり。

炊……吹

答案の認め方

(イ) されど、にはかのことゝて、兵器など備はらざりしかば、有り合せたる古槍、日本刀、獵銃などをとりて、勇ましくいでたちあるひは、哨兵となり、あるひは、傳令使となりなどして、晝夜、警戒の役をつとめたり。また館内の婦女も、あるひは、炊事をつかさどり、あるひは、負傷者を看護し、あるひは、防禦工事に用ふる、土囊を縫ひなどして、かひがひしくたち働きたり。

(ロ) けれども、にはかのことゆへ、いくさ道具などのある筈もありませんから、有り合せた古槍や日本刀や獵銃などをもつて、勇ましくみづくろいをなし、ものみ兵や傳令使などとなり、晝夜、警戒の役をつとめました。また、館内の婦人たちも、それ炊事を受け持つたり、ておひを看護したり、または、防禦工事に使ふ土囊を縫ふなど、いづれもまめしくたち働きました。

(ハ) 哨兵 モノミノ番兵ノコト

傳令使 隊長ノ命令ヲソノ部下ニ傳ヘル役ノコト

警戒の役 イマシメノ役ノコト

炊事 ニタキヲスルコト

看護 ミトリヲスルコト

防禦工事 フセグシゴト、イフコト

(3) 昨日、横山君を訪問せしに、横山君は、われを、丁寧^{テイネイ}に待^{マテ}遇^ユして、秘藏^{ヒサカズ}の書畫^{ショガ}及び彫刻物^{テウコクモノ}などを見せたり。

(4) 屋根は茅^{チガハ}にてふき、柱^{ハシラ}は地^チを深く掘^コりて立て、床^{トコ}もな

く、天井^{テウキヤウ}もなき建築^{ケンチク}なり。

(5) 梅檀^{ウメタン}ハ二葉^{ニエフ}ヨリ、カウバシ。トイフ諺^{コトワザ}ガアル。

(6) 鳥居^{トリイ}ノ前^{マエ}ノ廣^{ヒロ}キ庭^{ニワ}ニハ、石燈籠^{イシトウロウ}、リョーカ^{リョウカ}ハニ、ナラビ

中^{ナカ}ホドニ、太村益次郎^{タイムラタマシロウ}ノ銅像^{ドウゾウ}アリ。大村益次郎^{オオムラタマシロウ}ハ、明治維

新^{シン}ノユロ、兵事^{ヘイジ}ニ、功勞^{コウラウ}多^{オホク}カリシ人^{ヒト}ナリ。

(7) アタリ、シヅカニシテ、空氣^{クウキ}清^{キヨク}ク、景色^{ケシキ}、マダ、ヨシ。

(8) 空氣^{クウキ}中^{ナカ}ノ現象^{ゲンキョウ}ハ、吾人^{ガレタチ}ノ生活^{セイカツ}ニ關係^{ケンガイ}スルコト大^{オホク}ナリ

(9) 火山^{カゼン}ノ破裂^{ハツレツ}ハ、地中^{チチュウ}ニコモツテ、井^イル水蒸氣^{スイジョウキ}ガモトニ

ナツテ、起^{オキ}ルモノデア^ルル。

(10) 蜜蜂^{ミツバチ}ハ數千^{スズカザン}、又ハ數萬^{スズマン}ゾ、群^{ムラ}ヲナシテ、共同^{キョウドウ}生活^{セイカツ}ヲ營^{イナ}

ムモノナリ。

二、次の文字の読み方及び解釋を記せ。

行政 漁業 位置 宮城
利用 弒す 設け 服従
習慣 出家 勞働 不屈者
構造 保護 蚯蚓 討死
合戦 食器 紡績 健康

精^{セイ}清^{キヨク}……晴^{ハル}キ
裂^{レツ}……烈^{レツ}ハ
萬^{マン}……万^{マン}
城^{シヤウ}……域^キ
弒^シ……殺^{コロス}す
働^{ドウ}……動^{ウツク}
討^ツ……計^{ハカ}る

功^{コウ}……切^{キレ}ら
鳥^{トリ}……島^{シマ}
香^{カウ}……シ
掘^コる……掘^コり
待^{マテ}……侍^{ハヤシ}

第二節 書 取

一、次ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

分泌。精製。

名所。教訓。

參拜。兵器。

神宮。大神。

日本刀。防

捕正行。防

禦工事。早

植物。早速。

不着。恩賞。

恩賞。働く。

訪問。水蒸

破裂。水蒸

氣。功勞。

二、次の假名を漢字に改めよ。

萬世一系。

養蠶。農業。

商人。石燈

籠。炊事。

傳令使。京

都。四條。駿

ブンピ。セイセイ。メイシヨ。

サンバイ。キョークン。ヘイキ。

シングー。オホミカミ。ニッポントー

クスノキマサツラ。ボーギョコーシ。

シヨクブツ。サツソク。フナヤク。

オンシヨ。ハタラク。ホーモン。

ハレツ。スイシヨーキ。コーロー。

ばんせいいっけい。よーさん。のーぎょー

しよーにん。いしごーろー。すいじ。

でんれいし。きょーご。しじょーなはて。

神戸。淡川。

柳行李。消化。

警戒。消化。

野菜。

洋盃。洋燈。

猪口。

護。種。

料。科。

出納。

戴。載。

かうべ。みなごがは。やなぎごーり。

けいかい。しよーか。やさい

三、左ノ文字ノ讀ミ方ヲ片假名ニテ記セ。

皇祖。醫者。明石。洲本。備中。

小豆島。漁獵。有明海。川内川。洋盃。

洋燈。種類。保護。飲料。猪口。

諸書。熟字。

四、左の熟字の讀み方を平假名にて記せ。

一群。消化。八百屋。里親。關係。

製造。幸福。增長。野菜。供給。

頂戴。咳嗽。境内。沐浴。牛肉。

収獲。出納。豫修。療養。肝要。

行在所あんざいば

埋育うめいよく
理官りくわん

體軀たいく 体

カッセン。 ショーリユーシヤカイ。
ゲンリョー。 トーシヨীগー。
ビョードーイン。 エンリヤクジ。

二、次の字句の読み方及解釋を記せ。

神殿 武運 奇觀 碇泊 行在所
進取の氣象 義俠心 自立自營
出帆 發見 着手 開拓 謁見
生育 崇敬 豫報 輿儀 埋没

三、左の文の読み方及び意義を問ふ。但し附線の字句は特
に解釋せよ。

(1) こゝにて、御最期あるべきにあらず。急ぎ落ちさせ給
ふべし。

(2) 絹布ハ美シクシテ光アリ。輕軟ニシテ體ニカナフ。

陛れい 階かい

腹はら 復かへ

虫むし 蟻あき

商しやう 商しやう

(3) 天皇陛下のお役に立つことはおろか、父上の忠義も
むにして、しまふだらう。

(4) 蜜蜂ノ巢ハ六角形ノ小室ノ數限リナク、密接セルモ
ハナリ。コレハ、働蜂ガ腹ノ節ヨリ、蠟ノ薄板ヲ分泌シ、ツ
バニマゼツ、造レルモノナルガ、ソノ構造ノ巧妙ナル
コト、カ、ル小虫ノワザトハ思ハレザルホドナリ。

(5) 王政復古は、ひこへに、皇室の御稜威に由るこはいへ
また、國學者の國體發揮に力めしより、慷慨氣節の士、靡
然として、相和し、遂に空前の偉業を奏するに至りしな
り。

四、次の熟語の読み方および解釋を問ふ。

團體 農工商 增長 退去 價值
擴張 還俗 拍子 遺言 無分別

穀……穀
攻……攻
閉……閉

進歩發達。
增長。
天文臺。
獨立國。
誤解。薪炭。
埋沒。
彫刻物。手
傳。牧畜。

地穀。總攻擊。準備。畢竟。清淨。
長閑。木質。餓死。前肢。忘却。

第二節 書取

一、次ノ綴リニ適當スル漢字ヲ問フ。

シンポハッタツ。 ツーナヨシ。
テンモンダイ ドクリツコク。
ゴカイ。 シンタン。 マイボツ。
ナヨリユクブツ。 テツダイ。 ボクナク。

二、次の語の読み方を平假名にて書け。

遠足。三極。流鏑馬。境内。
割據。母衣。遵守。研究。
從者。奪掠。

三、次の綴りの附線の箇所を漢字に改めよ。

(1) せいみつなるちづをせいす。

(2) かくこくこーしはじたいのよーいならざるをさつす。

(3) しんきなるいんさつきかいをはつめいす。

四、次ノ地名ノ讀ミ方ヲ片假名ニテ記セ。

水戸。八戸。米子。米原。
高粱。嚴原。筑紫。鯀澤。
撫養。扇谷。

第三節 綴方

一、左の語に文字の誤用あらば正せ。

智職。貿易。訥税。貨弊。記綠。
須良。書幹文。栽培。搏愛。儉約。

二、左の文章中の次の處に適當なる漢字を入れ。

精密地圖。
製す。
各國公使。
事態。容易。
察す。
新規。印刷。
器械。發明。

慮……憶

虎……處

雪降らんは
未來、
雪降るは現
在、
雪降りたり
は過去なり

漁師

(1) すべて、課業は、自宅に〇て、〇〇し置くべし。豫修足らざれば、學校にて、教師の〇〇を受くるも、充分に記憶するを得難きものなり。

(2) 虎ノ足ニハ、猫ノ足ノゴトク、裏ニ〇キ肉アリ。先ニ隠顯〇〇ナルスルドキ〇アリテ、他ノ動物ニシノヒ寄りコレヲ〇フルニ適セリ。

三、次の句の誤りを正せ。

(1) 父母の恩は、山よりも深く、海よりも高し。

(2) 昨日は、雪降らん。

(3) 原田君は明日出立したり。

(4) 人は、滋養分を取らざれば、餓死せず。

四、次の口語を文語に改めよ。

いね、私は鹿兒島のうみばたのりょーしの子です。父は、早

臍甲斐

く、死んで、うちには母ばかり、のこってゐますが、その母から、「ふがひない。」ごままで、いはれるかと思ふと、くやくして、たまりません。といった。

五、次の文題にて、口語体の文を作れ。

(1) 梅。

(2) 入學試験期日を問合す文。

第三章

第一節 講 讀

一、左の字句を解釋せよ。

りっぱなる仕事。

さからふ。

いたはる。

周 旋。

わが身をつめて、人の痛さを知れ。

あまた。

いちじるし。

遺……遺
汽車、汽船
トイフトキ
ニハ汽船ト
キ蒸氣船ト
イフトキニ
ハ氣ヲ用フ

二、左ノ文字ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

原料。	涙。	遺言。	茶碗。	漆器。
汽船。	蒸氣船。	馬車。	繁昌。	英斷。
開闢。	出陣。	杓子。	植物。	細毛。
金魚。	順序。	特別。	大勝利。	栽培法。
宮中。	投機。	榮華。	律令。	質素。
顧問。	賄賂。	會葬。	構造。	變態。

三、次ノ綴ヲ讀メ。

ビョーイン。	ウンドーバ。
ケツシテ。	ジュギョーリョー。
ロツカク。	チューイ。
イシヨクジュー。	ブツピン。

三、次の文の讀み方及び意義並に、附線の字句の解釋を問

ふ。

(1) 桑ハ、春花サキ、夏實ナムス。葉ハ大キクシテ、蚕ノ食物トナリ、皮ハカウツト同シク、紙ヲスクニ用フ。

(2) 農工の事につけても、繪畫彫刻の道につけても、すべて、我が學淺ければ、その趣味を感ずることも、亦淺きものぞす。

(3) スベテ、草ノ莖、マタハ、葉ナドニ、傷ツケテ、黄色、赤黒キ色、マタハ、白キ色ノ汁流レ出ヅルモノ、マタハ、莖、葉ナドノ臭キモノノ中ニハ、毒アルモノ多シ。注意セザルベカラズ。

(4) 當時の國學者は、皆敬神尊王の説を持して、心を國體の發揮に注ぎ、先づ古語を研めて、古典に通じ、古典に通じて後に國體を發揮せんとして、寢食を忘れて多くの古

蚕——蠶
楮……書
畫……書
趣……赴
汗……汗
持……持

文書を涉獵したり。

第二節 書 取

一、次ノ綴ヲ漢字ニ改メヨ。

景色、恩賞、器量、切迫、肥料、匆卒、案内、成虫、律令、拜謁。

ケシキ。 オンシヨ。 キリヨ。
ギロン。 セツパク。 ヒリヨ。
シツコー ソーソツ。 アンナイ。
リツリヨ。 セイチエ。 ハイエツ。

二、左の文字を讀み方を平假名にて記せ。

濁……瀉
熟……塾・熱
化……北

御神體。 事 柄。 忠 義。 新 瀉。
警戒色。 熟 字。 八 尺。 幼 虫。
從 事。 客。 消 化。 勅 許。
首 領。 缺乏品。 剛 直。

三、左の文の附線を漢字に改めよ。

(1) 金魚、魚

(1) きんぎよは、きれいなうをです。

(2) 順序方法

(2) 製紙のじゅんじょは、ほーほーをかたらん。

(3) 關所破

(3) せきしよやぶりといつて、はりつけにするのであつた。

(4) 常、衛生、身體、衣服、住居、

(4) 人は、つねに、ゑいせいを重じて、しんたいいふくじょ。

頭(アタマ)

一きよを清潔にすべし。

網……網

四、次ノ文字ヲ暗書シ得ルマデ習ヘ。

糸……絲

労働。 頭。 六角。 里親。 分泌。 食事。
訪問。 待遇。 警報。 合戦。 網。 住居。
事情。 歡迎。 武運。 種類。 保護。 横糸。

第三節 綴 方

一、次の文語を口語に改めよ。

(1) 直接國稅年額貳圓以上をさむる獨立の男子を公民

こいふ。

(2) 今般の試験に於て入學の榮を得たり。

(3) 校則を遵守せよ。

(4) 貴君には、先日、首尾能く中學校に御入學遊ばされし由、全く平素の御勉強の結果、相顯れ候事と存じ奉り候

(5) ツバメハ、腹ノ外ハミナ黒ク、尾ハ長クシテ、先ノ方ニツニ分レタル小鳥ナリ、春ノナカバニ來リ、人家ノノキノ下ニ、巢ヲ作リテ、子ヲ育ツ。

(6) 箱根山中ニハ、温泉多シ。ソノウチ、湯本、塔澤、宮下、堂島、底倉、木賀、蘆湯ナドハ、昔ヨリ、世ニ、知ラレタリ。アタリ、シヅカニシテ、空氣清ク、景色、マタ、ヨケレバ、浴客、年中、タエズ。夏ハ、コトニ、多シ。

二、次ノ二文ヲ、一文ニ改作セヨ。

(1) 春ハ暖カナリ。夏ハ暑シ。

(2) 花開ク。鳥啼ク。

(3) 風にさらさる。雨にぬる。

(4) 聯隊旗のてがらは國のほまれなり。聯隊旗のけがれは國のはぢなり。

(5) 兄は弟を慈む。弟は兄を敬ふ。

(6) 耶蘇教を排斥す。外國人を放逐す。

(7) 事態の容易ならざるを察す。共同防禦の方法を講ぜり。

三、次の文題を作れ。

(1) 朋友(記事體)

(2) 入學せしを知らする文(候文體)

平素…平生
腹…腸
軒
湯本、塔澤、宮下、堂島、底倉、木賀、蘆湯。

春ハ暖カナシテ夏ハ暑シ。
花開キ、鳥啼ク。
耻譽

第四章

第一節 講 讀

一、次ノ綴ヲ讀メ。

- キンケンナヨナク。 ハクシキタサイ。
- ブツピン。 ショチユーキユーカ。
- シジョーセツバク。 シュナヨーシヤ。

二、次の文句を解釋せよ。但し、——線の字句の讀方を問ふ

- (1) 大義名分。
- (2) 名望高し。
- (3) 慷慨の議論。
- (4) ほしいまゝなる行。
- (5) その冤を訴ふ。
- (6) 市内、甚だ殷賑なり。

擅せん

甚たしん頗らんる

穿せんつ。

- (7) 困難は最良の教師。
- (8) 點滴石をうがつ。
- (9) 命を塵と戦ひし勇悍決死の士。
- (10) 千尋の海の底。

三、次の文の意義を問ふ。

- (1) ざーぶつぎやくたいぼーしかいといふんだいがあります。
- (2) いぬは、れいりな、ざーぶつであります。
- (3) うれいなければ、よろこびなし。くるしみの、ちのたのしみこそ、しんのたのしみなれ。
- (4) はやるゆーきは、たわまねぞ、つかれしみをばいかにせん。

四、次ノ文ノ附線ノ句ノ讀方如何。且ツ全文ノ解釋ヲナセ。

臣……臣

- (1) 彼ハ性質伶俐ナレドモ小シク狡猾ナリ。
 - (2) 忠臣ハ孝子ノ門ヨリ出ヅ。
 - (3) 危キ道ヲオカサズバ勝レシ功ハ立テラレシ勉メザルベケンヤ。
 - (4) 書生ハ儉素ト勉強トヲ貴ブ。
 - (5) 商人ハ百折不撓ノ精神ヲ以テ國利民福ヲ増進スルノ覺悟ナカルベカラズ。
 - (6) 着實ニシテ偉倅ヲモトメズ職業ニ勤勉シ正シキ生活ヲナスハ人タルモノ務ナリ。
- 五、左の文の読み方及び解釋を問ふ。但し附線のところは特に解釋せよ。

(1) 日光の山は、峯高く、谷深く、樹木しんしんこ生いしげりて、すでに尋常ならざるに、大谷川の清流、その間を流

れ、瀧は所々にかゝり、東照宮その他の朱殿玉樓老樹の間に隠見して、景色いはんかたなし。

(2) 石炭は、太古の植物が、地中に埋没して、化成したるものなり。その性は、なほだ燃ゆやすく、且つ火力強くして薪炭などの及ぶ所にあらず。故に、その効用極めて大なり。

(3) 朝は、なるべく早く起き、夜は、早くいぬべし。睡眠の間は、人によりて同じからざれども、凡そ、七八時間を度とすべし。

(4) 改良を企て、工夫をこらし、その間、失敗に失敗を重ね、一時、大に貧困にせまり、家財もあらかた賣りつくしたり。されど、これがために、少しもその志を屈せず、飢寒にたへ、艱苦をしのびて、その考案に一身をゆだね、遂に、完

没……投
性……姓

改……改

艱……難
考……老

全なる機械を發明せり。
六 次ノ字句ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

肉……肉
賣……買
宜……宜

朱肉。寫眞。模様。戰爭。危イ命。
睡眠。錠。丈夫。商賣。特別。
疲勞。愉快。兵糧。參考。建立。
手段。攻守。皇運。劇場。遺族。
廢物利用。行宮。便宜。氣力。僥倖。

第二節 書 取

一、左の綴りを漢字に改めよ。

道路、修繕、地球、警戒、色、出家、警戒、習慣、表面、發達、所在地、至急、注文。

ざーろ。 しゅーぜん。 ちきゅー。
けつぱー。 けいかいしよく。 しゅつけ。
しゅーかん。 ひょーめん。 はったつ。
しよざいち。 しきゅー。 ちゅーもん。

二、左ノ文字ノ讀方ヲ片假名ニテ示セ。

寇……寇
廊……廊

建長寺。 甘藷。 生糸。 海峽。 房總半島。
草薙劍。 七寶燒。 園城寺。 尖道湖。 姑。
元寇。 定期航海。 書物。 皇居。 社寺。
提灯。 蠟燭。 唱歌。 半鐘。 壯麗。
景色。 廻廊。 海藻。 區域。 健康。

三、次ノ文ノ符線ノ所ヲ漢字ニ改メヨ。

穀物、野菜、大抵、日用、品、缺グ。
親戚、近所、警察署、裁判所。
清、義和團、暴徒、耶穌教、排斥。

(1) ヲクモツ、ヤサイナドタイタイノニケヨーヒンニハカグルコトナシ。
(2) 私ノシンセキノキンシヨニ、ケイサツシヨトサイバ
ンシヨトガアル。
(3) シン國ノ北部ニギワダントイフポート起リ。ヤソキ
ョーチハイセキセントテ、大ニ世ヲサワガシタリ。

四、次の字句を諳書し得るまで習へ。

歴……曆
食物…植物

保護色。	警戒。	帳面。	皇居。	手段。
歴史。	汽車。	着物。	職業。	地熱。
親切。	客人。	食物。	植物。	忠節。

第三節 綴方

一、左の口語を文語に改めよ。

- (1) 苦しいことを忍ばぬならば、楽しい事もありますまい(記事體)
- (2) あなたは、何に様では、あらっしゃいませんかと、不意に問ひかけられました(記事體)
- (3) てせまで御不自由ではありませうが私方に御出で下さっても、ちっさもさし支へはございませぬ(候文體)
- (4) 試験がすみましたら、きつと御伺ひしやうと思つて居

ます(候文體)

二、左の文章の□所に漢字を○所に假名を入れよ。

- (1) 昆虫の□には松虫、鈴虫の○○○よき□にてなくものあり。また、蚕のごとく、美○○繭を○○るものあり。
- (2) やがて、正行は、つと立って、□れる涙を、袖○おさへ○○。佛間の□へ行った。母は、ふしぎに思つて、そつとあつて、行つて見ると、正行は、櫻井驛で、父からもらった、菊水の刀をぬき、袴の腰を○○さげて、いまや、腹に○○たてようとして居る。
- (3) 兵營内は、われわれの□ごはちがひ、萬事に、正しききまりありて、○○るにも、いぬる○○。食事するにも○○。らっぱのあひづにより、おきたるとき、いぬる前には、點呼といひて、いちいち、□□をしらべらるゝこと

に候。

三、左ノ漢字ノ上若クハ下ニ文字ヲ附ケテニツヅ、ノ熟語ヲ作レ。

構。議。崇。評。裁。
講。製。明。儉。險。

答案の認め方

構		結構、構造。	議		評議、議論。
崇		崇拜、崇敬。	評		批評、評判。
裁		總裁、裁縫。	講		講義、講釋。
製		精製、製造。	明		透明、明細。
儉		節儉、儉約。	險		危險、險阻。

三、次の文題を作れ。

- (1) 衛生(口語體)
- (2) 書籍を注文する文(候文體)

第五章

第一節 講 讀

一、次の句ヲ讀メ。

海藻	腰ノ袴	體ノ後端	足場	曆學者
要津	飽食暖衣	普通	選舉	助役
干木	蒔繪	智識	陶器	蚕卵紙
甘蔗	蜘蛛	佛閣	保存	眞珠
延曆寺	八王寺	彰仁親王	議定	關白

二、次の句を解釋せよ。

- (1) 不案内の事。
- (2) 公園の維持費。
- (3) 謝意を表しけり。
- (4) 景色いはんかたなし。

必……心
黄金

- (5) 獨立の志を立つべきなり。
- (6) 道路にある馬糞は所有主なし。
- (7) 豪傑は必ずしも畏るべき風をなさず。
- (8) たんぼには黄金の波うてり。
- (9) 破竹の勢。
- (10) 天は、みづから助くるものを助く。
- (11) 率先して勤儉を行ふ。
- (12) 尊王攘夷の論。
- (13) 産額豫定しがたし。
- (14) 土地開墾の業に従事す。
- (15) 習慣は第二の天性。

三、左ノ文字ノ解釋ヲ問フ。

鑄型 親切ノ報 模範 問道 帆檣林立

素焼の執着

協心 努力 秩序 陋習 外寇

大器晩成 留學生 通辨 素焼 執着

殺風景 涉獵 勤儉貯蓄 摘草 散步

貴重 豊饒 輔弼 逮捕 名利

業務擴張 俎板 漂流 名勝 玉樓

國是 挨拶 紹介 指揮 媾和

四、左の文章の意義及び附線の句の讀方を問ふ。

(1) 横須賀は軍港の一にして、大いなる造船所あり。その東南なる観音崎は、千葉縣の富津洲とあひ向ひ、ともに砲臺の設ありて、東京灣の口を守る。

(2) 昆虫ハ、足ノ六本アル虫類デ、多クハ、羽ガアツテ、空中ヲ飛ブ。トガデキル。松虫ヤ、蜜蜂ヤ、蚕ヤ、蚊ヤ、チヨリチヨナドハ、即チ昆虫デアル。

観音崎
富津洲

玉……王
媾……講……媾

蜜……密

(3) 近來、衛生の學漸く進み、土地の効用を信ずることも漸く深くなりて、須磨に、轉地療養なすもの日に多くなれり。

(4) 茶ヲ製スルニハ、五月ゴロ、新ニ出デタルヤハラカナル葉ヲツミ取り、之ヲ釜ニテムシ、次ニ、ソノムシタル葉ヲ蓆ニヒロゲ、シバラク冷シテ後、ホイロニ入レ、手ニテヨリナガラ、ホシ上グルナリ。

(5) 富士山は噴火山の好模型にして、古人の詩に「白扇さかさまにかくる東海」の天といふ句あるが、是れその圓錐形なるを形容したるものなり。

(6) 紙ニハ、日本紙ト西洋紙トアリ。日本紙ハ、楮、ミツマタ、麻、マダハ、ガンピナドノ皮ノ纖維ヨリ製シ、西洋紙ハ、ボロ、藁、マダハ、木材ノ纖維ナドヨリ製ス。

(7) 戦後に爲すべき事業固より多かるべし。雖も、殖産興業を奨励し、富國の道を講ずるは、蓋し、急務中の急務なるべし。

(8) 市、町、村ハ、イヅレモ、自治團體ナリ。オヨソ、市、町、村内ニ住居スルモノハ、スベテ、ソノ市、町、村ノ住民ニシテ、住民ハ公共ノ營造物ト、市、町、村ノ有セル財産トテ共用スル權利ヲ有スルトトモニ、市、町、村ノ費用ヲ分擔スベキ義務ヲオブ。タトヘバ、都會ノ住民ノ自由ニ、公園ニ遊ブ權利ヲ有スルトトモニ、ソノ維持費ヲ分擔スベキ義務ヲオブガゴトシ。

(9) 平生田舎にのみ住める人は、たまたま、大都會に立ち出でなば、繁華と便利とに驚きて、或はいつまでもここに居つきたしと思ふべく、都にのみ住める人は、あだか

頃
軟
釜
蒸
金

三
楮

興
業
興
業

長閑けさ
遇……過

肥料(コヤシ)
運ブ。

彼方。印刷
隊。常備艦
名譽。農産
物。壓服。鐵橋
兄弟。鐵橋
樟腦。牛肉
勤勉。牛肉
天主閣。

明礬

天井。壓力

物。丁寧、
取扱。粗
規則。守り
命。違ふ、
平生、正直
旨、智慧、
任せ、詐り
欺く、禍、
稀。

も、その反対に或は田舎の長閑けさを羨むべし。人はともすれば、餘所の境遇を羨むものなり。

(10) アル日朝七時ゴロ、家ヲ出デ、小川ニソヒテ行クニ青トシタル麥畑ノ中ニ、百姓ハイソガシゲニ草ヲ取り又コヤシヲハコビ居タリ。

第二節 書 取

一、次の綴りを漢字に改めよ。

かなた。 いんさつぶつ。 じょーびかんたい。
めいよ。 のーさんぶつ。 あっぶく。
きょーだい。 てつきょー。 しょーのー。
きんべん。 きょーにく。 てんしゅかく。

二、次ノ文字ノ讀方ヲ片假名ニテ書ケ。

明礬。 脚絆。 彰化。 基隆。 城壁。

新高山。 臘肭獸。 硫黃。 宗谷岬。 五稜廓。
天井。 密接。 奈良朝。 鑛物。 壓力。
露。 霜。 雪。 磐梯山。 破壊。
電。 激變。 膨脹力。 熔岩。 櫻島。
圓錐。 複雜。 地獄。 總稱。 追賞。

三、左の附線の處を漢字に改めよ。

- (1) 他人のものは、ていねいにこりあつかふべし。
- (2) けつして、そりやくにすべからず。
- (3) 入學の上は、能く、きそくをまもり、教師のめいにたがふべからず。
- (4) 人は、へいせいしよーじきをむねとすべし。我がちるにまかせて、いつはりあざむく者は、わさはひにあはざるものまれなり。

四、次の字句を諳書し得るまで習へ。

小川。川。河
牛……午
娘……狼

歸宅。	派出。	呼吸。	衛生。	近所。
注意。	乗客。	自然。	参考。	盛大。
奉公。	手紙。	小川。	百姓。	左右。
正直。	規則。	粗略。	牛馬。	器物。
砂糖。	娘。	勿卒。	泣き出す。	笑ひつゝ。

第三節 綴方

一、次の文章の□所に漢字を、○所に假名を嵌めよ。

- (1) 時間を□む心あらば、他人○訪問しても、□に要用の事○○を述べをへて還る○○。決して、他人をして、我が□○に空○○時間を費さしむべからず、他人も我と同じく時間を惜む□あるべければなり。
- (2) 食事は□くべからず、徐々に心地○○語話などして

徐……徐

□○へし。急がば、消化を害す、心地悪しく□○ても亦同じ。

- (3) 父上様には、だんだん□□も、おなほりなされて□○うちに、お歸りなさ○○このこと。みんな、たいそー、□○でをります。仰のことは、□□よく、こころがけてをります。○○○御安心下さいませ。

二、次の文語を口語に改めよ。

- (1) 名古屋市は、東京をさる、百里に近く、鐵道の便は、なほだ、多し。その人口三十萬あり。縣廳の所在地にして、また第三師團司令部あり。金の鯨をもって名高き名古屋城の天守閣は、今は、離宮となれり。市の産物には、織物、漆器、扇、七寶焼などあり。

- (2) 病人は、親切なる心をもって、靜に、おもしろく、介抱す

其だ、
鯨
天守閣
離宮
面白し

四、次の字句を諳書し得るまで習へ。

歸宅。	派出。	呼吸。	衛生。	近所。
注意。	乗客。	自然。	参考。	盛大。
奉公。	手紙。	小川。	百姓。	左右。
正直。	規則。	粗略。	牛馬。	器物。
砂糖。	娘。	勿卒。	泣き出す。	笑ひつゝ。

小川。川。河
牛………午
娘………狼

第三節 綴方

一、次の文章の□所に漢字を、○所に假名を嵌めよ。

(1) 時間を□む心あらば、他人○訪問しても、□に要用の事○○を述べをへて還る○○。決して、他人をして、我が□○に空○○時間を費さしむべからず、他人も我と同じく時間を惜む□あるべければなり。

(2) 食事は□ぐべからず、徐々に心地○○語話なごして

徐………除

□○○へし。急がば、消化を害す、心地悪しく□○○ても亦同じ。

(3) 父上様には、だんだん□□□も、おなほりなされて□
○うちに、お歸りなさ○このころ。みんな、たいそー、□
○でをります。仰のころは、□□、よく、こころがけてをります。○○○御安心下さいませ。

二、次の文語を口語に改めよ。

(1) 名古屋市は、東京をさる、百里に近く、鐵道の便、はなはだ、多し。その人口三十萬あり。縣廳の所在地にして、また第三師團司令部あり。金の鯨をもって名高き名古屋城の天守閣は、今は、離宮となれり。市の産物には、織物、漆器、扇、七寶焼などあり。

(2) 病人は、親切なる心をもって、靜に、おもしろく、介抱す

其だ、
鯨
天守閣
離宮
面白し

諺

祖父、祖母

心掛け、

珍し

るとききは、病人の心安く、平かにして、全快も案外速かな
るべし。世の諺にも、一に看病二に薬とて、看病の力は、遙
に薬の力に勝るものこそせり。

(3) 私留守中は、日々、學校へ通ひ、うちに居るときには、お
ぢい様や、おばあ様、母上などの仰を守るよし、ところが
けられ度候、いづれ、全快の上、歸宅し、いろいろ當地のめ
づらしきことなども話すべく候。

三、次の字句に誤りあらば正せ。

艱難 羽織袴 愉快 古郷 保穫

ついに。 なをさら。 あさがほ。 おをむぎ。

たさうるにもものなし。 まわる。 にわこり。

答案の認め方

羽織袴は、羽織袴。

古郷は、故郷。

保獲は、保護。

ついには、つひに。

なをさらは、なほさら。 あさがを、あさがほ。

たさうるにもものなしは、たさふるにもものなし。

まわるは、まはる。 にわこりは、にほこり。

四、次の文題を作れ。

(1) 鶏(口語體)

(2) 友人の病氣を見舞ふ文(候文體)

第六章

第一節 講讀

一、次の綴りを讀め。

(1) だいじょーり。

(2) こごもは、にんぎょをもつ。

(3) きみは、ほしびを、もらったか。

寝美

人形

大勝利

鐵砲 昨日 桑、成長 植物、栽培 庭、櫻、散る 父、留め。 敬禮、笑ふ 去る。

悦……… 墨……… 愉……… 愉 論……… 愉

- (4) わたくしは、てっぽうをもつてをります。
- (5) きのう、かへりました。
- (6) くはのはを、しよくして、せいあゝす。
- (7) しよくぶつを、さいばいす。
- (8) にはのさくらは、すでにちにけり。
- (9) ちちは、あわただしく、それを、ごめたり。
- (10) やがて、けいれいをして、にっこりこわらって、たちさ
った。

二 次ノ讀方ヲ、片假名ニテ記セ。

大國主命。	天然痘。	悦服。	美術。	公園。
醬油。	味淋。	天長節。	石垣。	砂石。
學問上。	夜明。	墨。	出發。	藥劑室。
愉快。	兵糧。	銚子。	木更津。	秩父絹。

三 次ノ句ノ意義及ビ附線ノ字句ノ解釋ヲ問フ。

- (1) 防禦に力をつくしたり。
- (2) 優劣を比較す。
- (3) 一切ノ事件ヲ議決ス。
- (4) 景色、畫の如し。
- (5) 氣象に激變起る。
- (6) 隱顯自在なり。
- (7) かひがひしくたち働く。
- (8) 外見を飾る。
- (9) すこぶる前代の弊政を改む。
- (10) 大に皇基を振起すべし。
- (11) 虎ノ子ハ地ニ落ナルヨリ牛ヲ食フ勢ガアル。
- (12) 海ニ無盡ノ富アリテ、波路ニ行カレヌ所ナシ。

(14)(13)

機關ノ構造精密ニシテ、巧妙ナルニハ一同驚嘆セリ
慈善家ハ、ミダリニ與ヘズシテ、正シク與フ。

四、次の語の解釋を問ふ。

豫算。さびれゆく。裝飾。技術。無頓着。

凱歌。熟讀玩味。糠に釘。舊蹟。分擔。

演習。情況。近況。事變。美麗。

行儀。機關手。風俗。氣焰を吐く。掛値。

見當違ひ。遺憾。距離。確實。無慮。

五、左の文の大意及び附線の字句の讀方を問ふ。

(1) 己より弱い者を苦しめるものは卑怯であります。

(2) その日は、たいそ、天氣のよい日で、空は青々として

すこしの雲もなく、遠い山は、霞がかかって、ほんのりこ

見わたをりました。

見わた

大層

掛値

釘……針

浴……沿

頃……頂

寂し、眺め

適……滴

(3) 「健全なる精神は、健全なる身體に宿る」とうたった、ロ

ーマの國民は、今から二千數百年前に於て、盛んに水浴

を行ひました。

(4) 我が國に名高き、月ヶ瀬の梅は、早や綻びそめ候由に

て、この様子にては、さだめし、次の日曜日に見頃ならん

ご申し來り候。

(5) 此地はさびしき漁村にして、海岸のながめもよろこ

く氣候の變化も亦少く、誠に絶好の場所と存じ候、殊に

海は遠淺にして、波靜かに、海底の砂細く、海水浴場とし

て、至極適當に御座候。

(6) 虎ハ、性質伶俐ナルノミナラズ、マタ、ソノ身體ノ構造

キハメテ、生活ニ適セルガ故ニ、タクミニ、人ノ攻撃ヲマ

ヌガレテ、今、ナホ、多ク生存セリ。

噴キ出ス
汗………仕

任………仕

(7) 岩石ニハ、水成岩ト、火成岩トノ二種アリ。水成岩トハ水ノ力ニテ、水ノ底ニデキタル岩ノユトニシテ、火成岩トハ、地球ノ内部ヨリ、フキダシタル、アツキ汗ノカタマリテ、デキタル岩ノユトナリ。

(8) 我ガ國ハ、建國以來二千六百六十餘年、イマダ一度モ外國ノハツカシメテ受ケタルユトナシ。コレ實ニ祖宗ノ威烈ト、祖先ノ忠節トニヨル。

(9) 世に忌むべきは、放縱懶惰もしくは、姑息無氣力にして、責任を守らず、職務を忽にする者なり。これに反して、世に尊ぶべきは、責任を重んじ、職に忠なる者なり。ここに、その職に殉するものに至りては、人間の事業中最も神聖なるものといふべし。

(10) 春の初花、秋の月、夏の青葉に、冬の雪、移りゆく世の有

様に、心驚くべきあらば、過ぎし月日を數へつゝ、學の業を勵にべし。

第二節 書 取

一、左ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

- (1) ボーセキカイシヤ。
- (2) エンヨーギヨギヨ。
- (3) ショーユをジョーゾーす。
- (4) ホジョユソツ。
- (5) イフクのセンタク。
- (6) カオクをシユーゼンす。
- (7) ウンカのクジョ。
- (8) ニハトリをカッター、タキギナトッたり。
- (9) レンタイ長のシキに従ふ。

紡績會社
遠洋漁業
醤油、醸造
補助輸卒
衣服、洗濯
家屋、修繕
浮塵子の驅
除、飼、探
薪、採
聯隊、指揮

温帯、人類生活、適當

(10) オンタイ地方は、シムルイのセイカツするにもっとも、デキトす。

二、次の漢字を平假名に改めよ。

- (1) 蒸氣機關の雛形。
- (2) 耕作運搬。
- (3) 牧畜の業盛なり。
- (4) 北海道舊土人保護法。
- (5) 春日神社、正倉院。
- (6) 殉死を禁ず。
- (7) 彼は艦隊を操縦せり。
- (8) 行在所に至れり。
- (9) 春と秋と、二回發生して、豌豆、蚕豆、油菜などを害し、秋は、蕎麥、大根、にんじんなどを害する。

(10) この他、中禪寺湖の北に、湯本温泉あり。東照宮の西に裏見瀧、東北に、霞降瀧ありて、いづれも、世に聞ゆたり。

三、次の假名を漢字に改めよ。

- 收穫。
 - 裝飾品。
 - 勤儉。
 - 維持費。
 - 複雑。
 - 奢侈。
 - 模範。
 - 勤勞。
 - 安寧。
 - 廻轉。
- (1) しゅーかく。(ユクモツノトリイレ)
 - (2) そよーしよくひん。(カザリノシナ)
 - (3) きんけん。(ツトメテ、ゲンヤクスルユト)
 - (4) むじひ。(モナツ、ケルヒヨ)
 - (5) ふくざつ。(ユミイリタルユト)
 - (6) しゃし。(オゴルユト)
 - (7) もはん。(テホンノユト)
 - (8) くんろー。(テガラホチナリ)
 - (9) あんねい。(ヤストラカナルユト)
 - (10) くわいてん。(マハルユト)

草履。
必須。

(11) ぶうり。(フミモノ、名)
(12) ひっすー。(ヒツヤウノユト)

四、次ノ漢字ニ片假名ヲ附セヨ。

雛形 伶俐 眞紅 菜種ノ花 簡單

顔 鼻 腹 腸 珊瑚の環

松脂 炊煙 土窟 大湊 敦賀

足袋跳足 日和 芝居 寢床 透明

五、次の文字を諳書し得るまで習へ。

勤儉 勳勞 必須 丁寧 川底

鯛 手紙 左右 旅行 宿屋

衣服 洗濯 汽車 乗客 夜中

候ふ 勉勵 朝夕 商業 繁昌

進歩 眼鏡 防禦 徵兵 旅團

第三節 綴方

一、次の文に誤字あらば正せ。

(1) 空清れて氣暖かなり。

(2) 紅梅の枝に二三輪の花が吹いた。

(3) 君に俸げし命惜しからず。

(4) 武功拔郡の者に、金鳩勳章を下賜せらる。

(5) 凱施兵を觀迎す。

二、次ノ漢字ヲ用井テニツヅ、ノ熟語ヲ作レ。

便 枝 積 製 模 報 授 親

三、次の語を文に改むべし。

(1) 善い事は、心に思ふと同時に、きつこ實行せねばなりません。(記事體)

(2) 四季の景色は、いづれも宜しうございますが、いきい

きこして、きもちのよいのは、春のながめでございます
(記事體)

(3) 明日おひまでらっしゃいますならば、お供いたし
たうございます。(候文體)

(4) お姉さんが、今度御歸りなさいましたそうですが、さ
うおうれしうございませう。(候文體)

四、次の文を作れ。

(1) 光陰惜むべし。

(2) 恩師に入學試験の模様を知らする文。

第七章

第一節 講讀

一、次の綴リヲ讀メ。

(1) ヨアケゴニテキガキタ。

(2) シューキハ、グンジンノセイシンナリ。

(3) ミニ、シミジミト、シミワタツタ。

(4) オヤノ、ルスチューニ、アタマガ、イタクナリ、オホイニ
ユンナンセリ。

二、次の讀方を問ふ。

螟虫 鶯 蜻蛉 消費 小腕

參宮 八咫の御鏡 姑 礎 棟

和蘭人 全體 覆へし 結果 風通し

三、次の句の意義及び附線の文字の讀方を問ふ。

(1) 率先して勤儉を行へ。

(2) みすばらしい小屋。

(3) その遺憾思ひやるべし。

(4) 無慘の死を悲む。

全
金

腕
枕

往いて
 出發…發足
 舟血…船皿

- (5) 海は共有の寶藏なり。
 - (6) 忠言耳に逆へごも行ひに利あり。
- 四、次ノ解釋ヲ問フ。

參觀交代。 侍所別當。 拍手喝采。 歸朝。

饗應。 殖産興業。 陳所。 無下。 哀悼。

五、次の文章の讀方及び附線の字句の解釋を問ふ。

- (1) 某地の櫻は、吾が地方に鳴る。花時毎に、來遊するもの前後相連るこかや、吾が郷これと遠からざれごも未だ往いて觀るを果さず。常に恨みさせしに、この頃南枝既に笑を呈すと聞きて、遊意おさへがたく、二三の學友を語らひて、遂に、出發しぬ。
- (2) 漁夫ら、ごきの聲をあげて、銛をうちたる鯨を追ふに血流れて、眞紅なれる海水、いたく、動搖して、舟は木の

卷…券
 干—乾す
 綿…線

裁…證據
 紅葉。
 紫紺。緑
 堅忍不拔。
 常規律。
 守。遊
 習慣。養ふ

- (3) 葉のたゞよふが如し。
- (3) 夜具、寢卷の如く、洗濯のまれなるものは、屢日に干し風をこほすべし。かくすれば、健康を助け、保存をよくするのみならず、綿ふくらみて、暖かさをますこと、誰も知る所なり。

第二節 書 取

- 一、左の線を引きたる所を漢字にて書け。
- (1) さい判に必要なるしよーこ物。
 - (2) 秋のもみぢ。
 - (3) むらさき。こんみどり。(色の名)
 - (4) けんになふばつ(の精神)。
 - (5) つねに、きりつをまもりて、よくはたらき、よくあそぶしよーかんをやしなふべし。

粟……粟
及……刀

二、次ノ漢字ノ讀方ヲ片假名ニテ記セ。

粟。藥。疲。袖。膨脹。

彩色。招魂社。燈籠。靈妙。白刃。

三、次の文字を諳書し得るまで習へ。

規律。習慣。養ふ。精神。風土。
呼吸。連絡。適當。婦德。鑛物。

第三節 綴方

一、左ノ文字ヲ用井テ、二ツノ熟語ヲ作レ。

家。近。地。生。両。
力。無。主。山。味。

二、左の文語を口語に改めよ。

達ヲ誤リナ
クハ誤リナ
リ。

(1) 我國の武士道は、年々ともいよいよ發達し、今や國民全體の精神となり、ひびり、文弱の弊をすくひしのみ

ならず、内はよく國を治め、外はよく國威を輝かせり。

(2) このころ、兵營内にて、習ひ居候ことは、學科と術科とにて、學科は、上官の官、姓名、各種類の兵のみわけかたとそのつとめ、隊の編制、銃器のくみたて、その部分の名稱となどにて、術科は、正しく立つこと、左、右に向くこと、正しく歩むこと、銃の扱方などにて候。これらは、教育なき者には、ずいぶん、困難なるよゝに候へとも、われわれ、小學教育をへたるものには、さまで、困難にはこれなく候。

三、左の事項を綴りて文章とせよ。

- (1) 茶は飲料に供するものなり。
- (2) 茶は古來より飲料に供せり。
- (3) 貴賤ともに飲料に供せり。

賤……賤

- (4) 近來主要の輸出品となれり。
- (5) 生絲に亞げる輸出品となれり。

四、左の文句に誤りあらば正せ。

- (1) 家業日々に榮へたれば堪へ難き望郷の念にうたれたり。
- (2) 私事相變らず壯健にて候は、御案じ下されまじく候。

五、次の題にて文を作れ。

- (1) 梅(記事體)
- (2) 復習會を催す文(書翰體)

第八章

第一節 講 讀

一、左の綴りを讀め。

武勇、學びの道。
芭蕉布、紬
泡盛、漆器
掘立小屋、家、住む。

塞……塞
束……束

- (1) ぶゆーひこにすぐれまなびのみちもまたあさからず。
- (2) このちばしーふつむぎあわもり、しっきなごをさんす。
- (3) アイヌは、ほったてごやのよーないへにすまってる。

二、左ノ語ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

冥加	懺悔	會釋	矛盾	珈琲
要塞	占領	笑ひながら	英斷	恩德
束縛	德望	狙撃	資本	ふくる夜
螺旋	吝嗇	帶封	蛹	鎮守府

三、左の句の意義及び附線の文字の讀方を問ふ。

- (1) うしろめたし。

等閑ちまじり

開いた

- (2) 新奇を好む。
- (3) 光消ぬ行く弓張りの月。
- (4) すなごるわざ。
- (5) 油断大敵。
- (6) 鳥なき里の蝙蝠。
- (7) 時後れけん験だになし。
- (8) なほざりにせしこを悔ゆ。
- (9) 力をためす試金取。
- (10) 影響を與へたるは西洋思想の輸入なり。
- (11) 天顔に咫尺取す。
- (12) 滿腔の同情。
- (13) 遜色なし。
- (14) 開いた口が塞がらぬ。

尙ホ

吸ス薄クキユー………
波ミニニ簿ホ

- (15) 粹を集めて大成す。
- 四、左ノ文ノ讀方及ビ附線ノ字句ノ解釋ヲ問フ。
- (1) 後三條天皇ハ、イタク、藤原氏の權ヲ抑ヘテ、政權ヲ握リ給ヒタリ。
- (2) 測量術ヲ研究シテ、ソノ奥儀ヲキハム。
- (3) 學術イマダ開ケズ、器械ナホ備ハラザルトキニアタリ、我國ノ驛路、海岸ヲ測量シテ、精密ナル地圖ヲ製シ、多クノ世人ニ利便ヲ與ヘタルモノハ誰ゾヤ。
- (4) 水ハ方圓ノ器ニ從ヒ、人ハ善惡ノ友ニヨル。
- (5) 高山ノ上ハ、空氣稀薄ナルヲ以テ、呼吸モ苦シク、ドーキモハゲシ。
- (6) 馬ハ早シトテ、朝シバシ走リテヤマンニハ、イカデカ牛ノ終日歩ルカンニ及ブベキ。

- (7) 猿澤池ハ、水清クシテ、鯉、龜ナド、多クスミ、岸ノ柳、水ニウツリテ、景色畫ノ如シ。
- (8) 水戸ノ義公ハ、御隠居ノ後、太田ノ奥、西山トイフ處ニ住マハレタレバ、世ニ西山公ト申ス。
- (9) 筑紫瀧ノ沿岸ハ、平野宏濶、地味膏腴、實ニ天與ノ樂土ニシテ、人口ノ稠密ナルユト九州ニ冠タリ。
- (10) カレノ便利ニカフルニ、コレノ心安サアリ。イヅレチマサレリトモ定メガタシ。ハデナル娛樂、ユソ田舎住居ニトボシケレ。衛生上其ノ他ノ危険ナキハ、其ノ失ヲツグナヒテ、餘リアルベシ。

第二節 書 取

慈善、郵便
稽古。

- 一、次ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。
ユーピン。 ケイユ。

活版刷、停
車場、贅澤
品。博覽會、遲
刻欠席。藍綬褒章、
養育院。

前途有爲、
青年、敏捷
決斷、速、
刻苦、勉勵、
成功。靖國
濟む。

- 二、次の漢字を平假名に改めよ。
瓜生岩。 醫師。 作法。 建武の中興。
瀬戸内海。 便船。 立憲國。 山櫻花。
日露戦争。 鳴戸海峡。 鎮海灣。 七尾(地名)。
襟。 顎。 夜盗虫。 案山子。

- 三、次の文中の片假名を漢字に改めよ。
(1) ゼント、ユーイのセイチンよ、萬事にピンシヨ一なれ
熟考は長く、ケツダンはスミヤカにせよ、ユツクベンレ
イはセイユ一の母ご思へ。
(2) 試験がスメば、ヤスクニ神社にサンケイし、兼ねて、キ

參詣、麒麟、
狸、見物、
博覽會、混、
雜、景況、

缺——欠

あえへあへ
冷へ冷え
覺へ覺え
見へ見え
植へ植ゑ
飢へ飢え

リン、シヨージョーをもケンプツし、ハクランカイ近傍
のコンザツのケイキョーを見るも一興ならん。
四、次の字を暗書し得るまで習へ。

- 慈 善。 郵便切手。 生花の稽古。 便船を求む。
- 汽車の連絡。 缺席届。 遅 刻。 立 憲。
- 談 話。 材 料。 團 結。 散 步。

第三節 綴 方

一、左の送り假名に誤りあれば正せ。

- (1) 空中の水蒸氣冷やかなる風にあれば忽ち冷へて雲
ごなる。
- (2) 時下追々暑さを覺へ申し候。
- (3) 向ふの山腹に、學校が見へてゐます。
- (4) 庭に、綺麗な樹が植ゑてあります。

二、左の文章を口語に改作せよ。

紫式部は、年少きより才學人に勝れ、博く和漢の史籍に涉
り、和歌、管絃、裁縫の業に至るまで、究めざるものなかりき。
後に、上東門院に仕へ、心を盡して、かしづき奉りたれば、上
東門院も、式部をまたなきものに思召し給ひき。

三、次ノ文章ヲ作レ。

- (1) 春(口語體)
- (2) 友人の病氣を見舞ふ文(書翰體)

第九章

第一節 講 讀

一、次の句の讀方及び意義を問ふ。

- (1) 他山の石。
- (2) 禍福は糾へる繩の如し。

管……管

必ず

夢登ゆ

- (3) かならず明日をたのむなよ。
- (4) 面影をのこす。
- (5) いらかそびゆ。
- (6) うなだれ。
- (7) 人才を登用す。
- (8) 智識を世界に求めん。
- (9) 噂をすれば影こやら。
- (10) 間然する處なし。
- (11) 良薬は口に苦けれども病に利あり。
- (12) 聖人は尺璧を貴はずして寸陰を貴ぶ。
- (13) 巧なる形容。
- (14) 配所の月。
- (15) 丁年に達す。

移る…還る
遂…遂

- (16) 未曾有のこご。
 - (17) 潮のごこく城内に入りこみぬ。
 - (18) 人々たゆみなく防禦に力をつくしたり。
 - (19) 言ふは易く行ふは難し。
 - (20) 腑に落ちぬ様子。
- 二、次の漢字の讀方及び解釋ヲ問フ。
- 卒倒。雄姿。燈籠。啓發。遠足。
- 課程。磯邊。猛獸。感佩。絶佳。
- 割粥。散在。相手。死骸。勿論。
- 三、次の文の讀方及び附線の字句の解釋を問ふ。
- (1) 複雑なる器械を以て、精密な研究をなし、遂に種々の理學上の發見をしました。
 - (2) 其私塾は、後、三田に移りたりしが、兵亂漸くをさまれ

る時なりしかば、學に志すもの争うて、こゝに來集せり。諭告の之を教育するや、すべていぎりす語の書を用ゐて、つこめて、日新の智識を與へ、獨立自尊を主義として、國家有用の材を養成せり。

(3) 土木功就り、今日落成ノ式ヲ舉ゲラル。不肖等モ亦席末ニ列スルヲ得テ、欣喜何カ之ニ過ギシ、聊カ、蕪詞ヲ陳ベテ之ヲ祝ス。

(4) 鐘の銘に「國家安康」の句ありければ、家康これ、わが名を分ちて、のろはんとするなり。さて供養を止めしむ。秀頼のけらい、大いに辯解すれどもきかず。つひに、銘の作者を問ひたゞし、また、人を京都につかはし、五山の僧を集めて、銘の句を判ぜしぬ。五山の僧家康の威勢に恐れ多く、不吉なりと判じたり。

末……末

辯……辯

- (5) 市町村會は、法律命令に従ひて、市町村條例規則を設け、又之を改正すること、教育、土木、衛生の如き、市町村費を以て支辨すべき事業、歳入歳出の豫算等を議決す。
- (6) 近來、實業の聲は、全國を動かせり。固より實業に非ざれば、國を富ます事能はず。然れども、實業は、利己に傾き易き弊あり。此弊害を除かざれば、實業は國家の用をなさず。

第二節 書 取

一、次ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

- (1) マシユーにイシユーするもの多し。
- (2) 虎の足には、チユの足の如く、ウラに、ヤハラカきニクあり。サキに、インケンシザイなるスルドキツメあり。
- (3) 忠敬人となり、シヨージキにして、ガイケンを飾らず

滿州、移住、猫、裏、柔、肉、先、隱、顯、自在、鋭、爪、正、直、外、見

氣力キリキ、盛盛カシ、屈屈カス、困困マシ、難難シ

キリヨク、サカンにして、かつてユンナンに、クツせしこ
ごなし。

二、左ノ文字ニ片假名ヲ附セヨ。

社稷 輿論 漂渺 埠頭 咄嗟

東大寺 大使館 常盤木 大寶令 院政

三、左の文字を諳書し得るまで書け。

課程 困難 感佩 啓發 散在

私塾 弊害 圓 錢 危機一髮

第三節 綴方

一、左ノ文字ニ誤アラバ正セ。

柳行季 日向雛 僅王 慈善興行 給全

二、次の文の□に漢字を、○に假名を入れよ。

(1) □き日に、扇を○○へば、風□りて、我が身を吹くは

扇セウ、扇扇セウ子コ

見え、揺揺ユり

○○もあるらん。これは、我れらのめぐりに、□□こて、人
の目に見ぬぬ○○あるを、□にてゆり動かして□こし
たるによるなり。

(2) またある日、一人の友人、馬に□□て、野に出でしに

匹ヒツ、疋疋ヒツ

路○○○して、進み難○ころに□り、一匹の豚の、泥の
中におちいりてもがき□むを見たり。リンホルンは、そ
のまゝ、七町ばかりも□きしが、友人に○○○われはさ
きの豚を□○あげねば、心やすからず。こいひ、ひさか
へして、□を救ひあげて、たち去り○○。

三、次の題にて口語體の文を作れ。

(1) 公園

(2) 友人へ病氣見舞の返事

第十章

第一節 講 讀

一、次の綴りを讀め。

- (1) わがみをつめて、ひとのいたさをしれ。
- (2) こくかいぎいんにせんきよせらる。
- (3) ごれいをかいほすべしこのろん。
- (4) しよーごくてんのーは、そのおこないをほめさせたまひき。
- (5) おーむねぎよりよーをいこなみたり。

二、次の文字ノ讀方及び解釋ヲ問フ。

- 要路 脅迫 安座 幣帛 調度
- 只管 領海 寡婦 蹉跌 上首尾

三、次の句の讀方及び解釋を問ふ。

只 座
— ||
唯 坐

緑……緑

瓜 爪

氷……水……永

- (1) 柳緑に、花紅なり。
- (2) 雲井に聳ゆ。
- (3) 費用のおびたいしきをうれふ。
- (4) 秘密はまゝ私曲偏頗の媒となる。
- (5) 憲法は、國家統治の原則を定めたるものあり。
- (6) 能ある鷹は爪をかくす。
- (7) 瓜の蔓に茄子はならぬ。
- (8) 誰かこれを悲哀ならずこいはんや。
- (9) 同類相求む。
- (10) 艱難は、汝を玉にす。

四、左ノ文字ノ讀方ヲ問フ。

- 餓死 氷山 屏風 輜重兵 顯微鏡
- 三位 麥稈帽子 地震 油繪 障子

干……子

尙ほ

式……戒

五、左の全文の意義及び附線の字句の讀方を問ふ。

- (1) あゝ何の無骨男子や、昨日は勇にして今日は怯こなる。汝斯くの如くにして、なほ國家の干城を以て自ら任ずるか、慚死せよ、慚死せよ、もし世に斯の如き男子のみなりせば、我が國の先途をいかにせむ。
- (2) 藤房やがていかにせん、頼むかけさて、たちよればなほ、袖ぬらす、松の下露こ、御返歌申し泣きゐたる、やみの天地を、またもこの御代にかへすは、たが任まり、金剛山下に、忠士あり。
- (3) 東の空、ほのぼのこ白みゆく頃、艦の音勇ましく、沖へ向ふ數十艘の小舟あり。舟ごとに、一本の旗を立てたり。八挺の艦にて、漕こぎ、一人艦に立ちて、舟を指揮す。
- (4) 式部の著したる書に、源氏物語といふものあり。五十

著……著
おもしろく

屈……屈

此方
彼方

四帖に分れたる大作にして、そのすぢもおもしろく、文章も、はなはだ、たくみなれば、天皇これを見たまひて、學識あるものゝ作なり。さて、大いに賞したまひき。この書は、今にいたるまで、文章の模範として、多くの學者に愛讀せらる。

(5) 手は屈伸自在なり、故に、之を動かして、種々の仕事をあすべし。よく手を動かすに熟練せるものを上手うといひ、否らざるものを下手ひといふ。

(6) 流るゝこもあき里川底は泥なれども、水は澄みたり。こなたには、小徑行人なく、かなたは、椿つばき自ら垣かきになりて、多く花をつけたり。

第二節 書 取

一、次の意味ノ漢字ヲ書ケ。

共同。
圓錐形。
修繕。
循環。
透明。
砥石。
石英。
夜盗虫。
青海原
焚………禁

- 一、 次の讀方を平假名にて書け。
- (1) キョードー(いっしょ)
(2) エンスイケイ(まるみのかたち)
(3) シューゼン(つくろい)
(4) シュンカン(めぐり)
(5) トーメイ(すきこはる)
(6) トイシ(ものゝ名)
(7) セキエイ(ものゝ名)
(8) ヨトームシ(虫の名)
- 二、 次の讀方を平假名にて書け。
- 青海原 扶桑の國 五月雨 節句
吝 畜 煮 焚 石 墨 酸 素
馬 鹿 鍛 冶 水雷母艦 傳令使
- 三、 次の文ノ片假名ヲ漢字に改メヨ。

蚕、飼、糸
紡ぐ、瓜、蔓、茄子
家畜、慘酷
使役、人間
性質、自然
暴虐

- (1) カヒコをカヒイトをツムぐ。
(2) ウリノツルにナスはならぬ。
(3) カナクをザンコクにシエキするときは、ニンゲンのセイシツ、シゼンにボーギャクとなる。
四、 次の文字を諳書し得るまで習へ。
- 鍛治 節句 砥石 修繕 届
戒 箸 八挺 無骨男子 屏風
干城 柱石 金剛山 冰山 麥稈
- 第三節 綴方
- 一、 次の文を書翰體に改めよ。
- (1) 御病氣は、昨今、いかゞですか、先日、金光君が御見舞に参つて、歸つての話には、大分、御輕快この事で、何よりの御事、級中一同安心しました、しかし、病氣は恢復期が

大切だといひますから、精々御加養なされる様祈ります
 (2) 御尋ねのことは、學校で聞き合いましたら、まだしか
 ことは、わかりませんが、たぶん、入學試験は、あるだらうこ
 のことで、ございました。

二、次ノ文字ノ上若クハ下ニ他ノ文字ヲ附シテ、熟語ニツ
 ヲ、ナ作レ。

恩。 思。 指。 色。 守。 發。
 兵。 産。 注。 往。 柱。 駐。

三、次の題にて文章を作れ。

- (1) 父母(記事體)
- (2) 吾が家(口語體)
- (3) 花見に友を誘ふ文(候文體)

第十一章

第一節 講 讀

一、左ノ熟語ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

用意萬端。 扶 翼。 優勝者。 追 賞。
 甲 胃。 慘 愴。 洗面器。 風俗矯正。
 義捐金。 波止場。 面 影。 配 置。

胃
胃
損
損

二、左の句の讀方及び意義を問ふ。

- (1) 沖の小島の松の上には満月の影涼し。
- (2) 諸國の浪士を集めて、再び、兵をあげたり。
- (3) 新思想と舊思想とは、常に、矛盾衝突をまぬがれない
- (4) 石鹼は洗濯用、化粧用、醫療用として、山間僻地に至る
 まで、その需用極めてひろし。
- (5) 淺き川も深く渡れ。

須らく

幣……弊

(6) わざごならぬ所に無限の妙味がある。
(7) 男子はいふに及ばず、女子とても尙武の心掛大切なるべし。

(8) 兵事は昔は専ら武士の務なりしかども、今は一般國民の義務となれり。

(9) 我國の女子たるものは、須らく海國の婦人たることを覺悟すべし。

(10) 婦人の根掛簪の珠などに用ふる珊瑚は海底より得たるものなり。

三、次ノ文字ノ讀方ヲ問フ。

- 榮 都 鄙 會長 鼻 酒屋
- 別格官幣社 不思議 隣 生蕃 休憩
- 鯛 鱈 鰯 鯨 蕎麥

絶エズ 皺……皺

四、次の文の讀方及び附線の字句の解釋を問ふ。

(1) 地球ノ内部ヨリ起ル變動ハ、ミナ地熱ノ作用ナリ。ソモ地球ハハシメテ地殼に皺ヲ生シタル後モ絶エズ地熱ヲ放散シテ冷却シ、収縮スルモノナルガユエニ、シバシバ地殼ノ隆起陷没ヲ起ユシタリ。我が國ノ太平洋海岸ニハ、海底ノ隆起シタルアト多ク、日本海岸ニハ陸地陷没シテ海水ノシタルアト多シ。

(2) 春季休業は來りぬ。いざあすは、わが故里へ歸らむ。日はくれたり、雨も止みぬ。窓にほへる夕月の影は、はやくもあすの晴天ならむを知らせがほなり。あなげにも、樂しき心よ、いでさらば、あけなんあすの更に樂しかるべきを想ふて、われは、あたゝかきこよいの夢に入らむかな。

洪……供

衰……哀
炭……灰

- (3) 奈良ハ、奈良朝七代七十餘年ノ間、御代々ノ都ノアリシ所ナリ。ソノ當時ハ、皇居ヲハジメトシテ、神社、佛閣、所々ニ立テテ、ハナハダ盛ナリシガ、桓武天皇ノ都ヲ山城ノ國ニ移シタマヒシヨリ、シダイニサビレユキテ、ツヒニハ、都ノ跡モ田畑トカハルニイタレリ。
- (4) 連日ノ大雨、今日も尙止まず、風さへ吹き出でたれば、洪水あるべしなど、噂ざりざりなりしが、晝過ぐる頃より、案の外に霽れ渡り、洪水の沙汰は、水ごともに流れうせ、折々蟬の聲漏れ聞えて、いごめでたし、夜は五日月、芋の葉にさやかになり。
- (5) 凡ソ、國家ノ貧富強弱ハ、商工業ノ盛衰ヲ以テ知ルベク、商工業ノ盛衰ハ、石炭ヲ消費スルユトノ多少ニヨリテ、知ルヲ得ベシ。

第二節 書 取

古代風建築
適當、文字
補足。
春日神社、
奈良市、社、
殿、壯麗、
其、廊、無、
數、金燈籠、
釣、社前、
路傍、石燈
籠。

- 一、次ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。
 - (1) ユダイフーのケンナク。
 - (2) テキトーのモンシをホソクすべし。
 - (3) カスガジンシヤはナラシにあり、シャテンはソーレにして、ソノカイローには、ムスーのカナドーローをツリたり。また、シヤゼン、ロポーなどは、イシドーロー、極めて多し。
- 二、次の文字を平假名にて書け。
 - 島嶼。 直徑。 旅團。 雄蕊。 造花。
 - 粘板岩。 縣廳。 嗽草山。 唐招提寺。 竹藪。
- 三、次の文字を暗書し得るまで書け。
 - 樹林。 面影。 田畑。 雨具。 傘。

木像。 鐵道。 曜日。 御安心。 夢。

第三節 綴方

一、左の文中漢字に誤あらば、其の字の左に正しき文字を書け。

(1) 彼ハ身ヲ犠牲ニス。 四邊ヲ疑視ス。

(2) 今日の春日和は、餘程暖かなれば、晝すぐる頂より一家内打ちつごひ、野邊にて門を出づれば、大陽の光りうらゝかにして、島の聲四方に聞ゆ、清神爽快にして身體もさものにのぶる心地ぞせし。野に出ずれば、見渡す限り、縁したたるばかりに、苦草萌ゆ出で、遠山の麓、霞たなびきて、雪雀は、空高く囀り、胡蝶は草花に戯れ狂ひ、いごものごけき春景色と、心も空になりて、妹ごごもに、草を滴み、兄ごごもに、駈けくらへなごをなし時を怠れて遊

技
……
枝

ぶ程に、母の歸りを促しければ、いざこて野に別れを告げしごき、山寺の鐘の音一つ二つ。

二、左ノ文語ヲ口語ニ改メヨ。

(1) 巧ニ笛ヲ吹ク人アリ。其技ヲ傳フルニ曾テ拙キ師ヨリ學ビシ者ニハ二倍ノ修金ヲ出サシメタリ。或人ソノ故ヲ問ヒシニ、人ハステニ知レルコトヲ忘レントスルハ、未ダ知ラザルコトヲ學バントスル人ヨリモ難シト答ヘキ。誠ニ習慣ノ除キガタキハカクノ如シ。

(2) 臺北は臺灣第一の都會にして、總督府のある所なり。市街は支那風にして、周圍に城壁をめぐらす。城外の市街を合せて、人口およそ七萬餘あり。

三、次の文字を含む熟語を二つづつ、作れ。
役 常 用 助 供 利

形。待。推。點。戒。同。

四、次ノ文ヲ口語體ニテ書ケ。

(1) 春ノ散歩。

(2) 月。

(3) 傘を返却する文。

第十二章

第一節 講 讀

一、次の句の讀方及び意義を問ふ。

(1) 思もなやむ。

(2) 謙遜を旨とせよ。

(3) ちめゆめ怠るな。

(4) 學問の要は活用にあり。これを活用せざれば、無學に
ひこし。

(5) 我國の蒼生は、永く太平の福を受く。

(6) 身体を清淨潔白にするは、衛生上肝要あり

(7) まなびの庭につごふ子よ、撓まず摘めよをしへ草。

(8) 梅の枝傳ひて、鶯のまだ調はぬ聲にて鳴きたるは、い
ごめづらし。

(9) 往來絡繹織るが如し。

(10) 親しきなかにも禮儀あり。

(11) 荒地を開墾して、益々美田良甫を増加す。

(12) 過て改むるに憚かること勿れ。

(13) 教の山にしをりあり。

(14) 先哲の經營慘憺たるを見よ。

(15) 海を見る事、坦途の如く、縱横自在に漕ぎまはる。

(16) 名も知れぬ花、われ劣らじと咲き亂れたり。

慮………膚
オモシカ
ハダ

藤………藤
ス
ス

二、次の讀方及び解釋を問ふ。

殿堂	樓門	絶壁	官衙	平垣
玻璃	皮膚	陶土	牛乳桶	握手
波路	驚嘆	徒歩	奔走	觀察
竊取	彈丸	美談	放逐	筒袖

三、次の讀方ヲ問フ。

樞密院	出雲	因幡	天橋立	巖島
松島	後樂園	栗林公園	兼六公園	總名
縫模様	赤十字社	藤席	前齒	驢馬
助役	名譽職	師團	巡洋艦	通報艦

四、次の文章の大意及び附線の文字の讀方を問ふ。

(1) われ／＼國民が米と共に一日もなくてはならぬものとするは茶なり。三度の食事にこれを用ふるはいふ

渴………渴

までもなし。その間々に渴をいやし、煩を除き、睡氣をさまし、思考をまし、氣力を盛んならしむるにも、茶を用ひざるはなく、また、賓客をもてなすには、上下の別なく、必ず缺ぐべからざるものこそせり。かくのごとく、われ／＼に要用ある茶は、如何なるものぞ、いふに、早く支那より傳はり來りしものなり。

(2) 理想の岩機智の濠高く、潔けき品性の城に籠りて、獨立の氣象の旗を翻し、眼界廣く見渡せば、前途樂しき遠大の志望の海の彼方には、成功の波湧き起てり。

(3) 支那國民の忍耐力に至りては、時として、造化の力を奪ふ事あり。彼の瘠地として有名なりし新嘉坡を、今の鬱葱なる菜園に化したるにあらずや。異域に入りて、人跡の至らざる寂寥の地に草庵を結び、一意貨殖の道に

堪へ

汲々たり。之が爲に、幾多の星霜を犠牲とするも、毫も介意せず、平然自得たる有様に至りては、轉感心に堪へざるなり。

(4) 薬瓶、皿、鏡、顯微鏡など、みな、がらすにて造りたるものならずや、實に、がらすは、人間快樂の父、學問進歩の母といふべきあり。

(5) 種々の寶は海にあり、取れど拾へどつきもせじ、思へや、獲物うち積みて、歸る波路の愉快さを。

(6) 漆器とは、膳、碗、重箱、硯箱、菓子器等、凡て、漆を塗りたる器具の總名なり。この製作は、我が國人が、殊に長じたる技術にして、外國人も、甚だこれを賞揚すといふ。

第二節 書 取

一、次ノ語ヲ漢字ニ改メヨ。

菓……果

豪傑。

擲ッ。

行幸。

遵守。

考案。

舌。胸。肩。

鍋。釜。鉢。

棕。椏。菊。

燕。鶴。雀。

熊。狼。猿。

摩……磨

(1) ゴーケツ。(智勇人にすぐれたるもの)

(2) ナゲウツ。(なげること)

(3) ギョーヨー。(陛下のみゆきあらせらるゝこと)

(4) シュンシュ。(まもりしだがふこと)

(5) コーアン。(かんがへること)

(6) シタ。ム子。カタ。(身体の一部の名)

(7) ナベ。カマ。ハチ。(器具の名)

(8) シュロ。キク。(植物の名)

(9) ツバメ。ツル。スバメ。(鳥の名)

(10) クマ。オホカミ。サル。(獸の名)

二、次の漢字を平假名にて書け。

種子島 薩摩 緋 室 蘭 獵 虎
鵜 飼 傍 多治見 揖斐川

段ノ、扇ノ、候
暖イ、野原、
散歩、緑ノ
茂リ、小徑
小高い、櫻
澤山、盛
咲いて居る

寢覺床。 千曲川。 親不知。 透 綾。
若狹塗。 奉書紬。 春慶塗。 津輕富士。

三、

次ノ文ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

(1) このダンおんト、ケ申上ソロ。

(2) アタ、カい、春の日、ノハラに、サンボに行きました。ミ

ドリノ草ノシゲリタルユミチを行クコ、ユタカい丘に
出でました。その上には、サクラがタクサンありまして
サカンに、サいてナりました。

四、

次ノ文字を諸書し得るまで書け。

寢覺。 花見。 誘ふ。 芝居。 拜啓。
衛生の道。 音信。 不沙汰。 電報。 如何。
世話。 奉書紙。 鍋。 釜。 水鉢。
權利。 義務。 長持。 箆筒。 戸障子。

第三節 綴 方

一、 次ノ二文を一文に直せ。

(1) 馬は人を乗す。 馬は走る。

(2) 物ヲ大切ニセ子バナラヌ。 物ヲ粗末ニシテハナリ

マセヌ。

(3) 今日ノ學びを今日なせよ。 必ず明日をたのむなよ。

(4) 稻ハ田ニ作ル。 麥ハ畑ニ作ル。

(5) 弘前市は第八師團司令部のある所なり。 大湊に水

雷團の設あり。

(6) 虎ハ熱地ヲ選ブ。 熊ハ寒地ヲ好ム。

二、 次ノ文字ノ字音ト意味トノ相違セル所ヲ問フ。

墓 — 暮 — 買 — 賣

功 — 切 — 巧 — 枝 — 技 — 杖

選……撰

第十三章

第一節 講 讀

一、次ノ語ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

鞏固。	緩急。	淵源。	無窮。	恭謙。
統治權。	協賛。	禽獸。	追擊。	乳呑子。
煙突。	運搬。	軌道。	諮詢。	審議。

二、次の句の讀方及び解釋を問ふ。

- (1) 動もすれば顛覆せんとす。
- (2) 病は口より入るもの多く、禍は口より出づるもの少なからず。
- (3) 伸縮自在なる一種の眼鏡を作りたり。
- (4) たゞ讀書一事は、友なくして、獨り樂むべし。
- (5) 世間に花さいふ花は多いが、櫻にまさる花はない。

禍……過

かにも櫻は花の王であるわい。

- (6) がらすのごく良いものは、たいがい外國から輸入してある。口惜しいことではないか。

- (7) 我軍の勇敢精銳なるは、萬國無比にして、列國の齊しく羨望する所なり。

- (8) 始あり、よく終あるは、拔群非凡の人にして、一心不亂になり得る人之を能くす。

- (9) その性、快活、溫順、その語は、懇懇、その行は、著實なり。
- (10) 寂しかりし僻地も、今は屋宇櫛比の都府となるに至れり。

三、次ノ文字ノ讀方ヲ問フ。

抑へ。	悩ます。	嫁ぐ。	熱海。	鹹き。
同盟。	道筋。	常食。	丈夫。	月山。

抑へ……柳

天龍。分流。八丈島。後志。琉球。
牆壁礁。虛弱。造幣局長。幼子。脂。

四、次の文の讀方及び大意を問ふ。但し附線の字句は特に解釋せよ。

- (1) 果樹は、梨、柿、林檎、密柑の樹類をいふ。これらの果實は、味美にして、心氣をさわやかにし、食物の消化を助け、かつ滋養分に富めるをもつて、大いに人に賞せらる。
- (2) 一碗の溢茶も、疲れたる旅客には、千金のたまものよりありがたかるべく、一片の笑も、憂あるものには限りなき樂みなるべく、一足の古足袋、一枚の破單衣も、心の誠をこめて與ふれば、金剛石の頸飾よりもありがたく感ずべし。すべて慈善は金高にあらず、品物にあらず、心なり。

行脚

あさがほ

- (3) 大日本帝國憲法ハ、我が天皇陛下ガ、深ク國家ノ隆盛ト、臣民ノ幸福トヲ増進センコトヲ望マセタマフ。大御心ヨリ、制定シタマヒタルモノニシテ、明治二十二年二月十一日紀元節ノ佳節ヲ以テ、萬民歡呼ノウツテニ發布シタマヒタルナリ。
- (4) 天皇ハ、國ノ元首ニシテ、大權ヲ總攬シ、陸海軍ヲ統帥シ、戰ヲ宣シ、和ヲ媾シ、諸般ノ條約ヲ締結シタマフ。
- (5) 加賀の千代は世に名高き俳人なりき。ある朝、水を汲まむとて、井戸ばたに至りしに、傍なるあさがほの蔓、いつの間、にやらむ釣瓶の竿にからみつき、花二三輪咲き出で、露を帯びたる風情ゆかしかりけり。
- (6) 西行も和歌にうき身をやつして、天下を行脚せしのみならず、さまざま偉さするに足らざれど、絶大の暴僧文

覺を辟易せしめ、當時の將軍をして、兵を講ぜんことを請はしめし膽氣と武術とありてこそ、脱俗非凡なりといはるゝなれ。

(7) あたりの景色を眺むれば、四方の山々には、霞の幕を張り、つゞく菜畑には、花の筵を敷けり。農夫が鋤鋏の手を休めたるも、道行く人の歩みの遅きも、この景色を眺めんごてなるべし。

(8) 田舎にては、都會の如き繁華もなく、又都會の如き便利もなし。されど、其生活の心安きと、その山水の眺の清きと、その人情の淳朴なること、その空氣の清爽なることは、都會に求めがたき寶なり。かの春の花見、わらび取り、秋のもみぢ、茸狩り、冬の雪見など、これまた、都會の人の深く羨む樂なり。

爽……爽

紅葉

第二節 書取

一、次ノ片假名ヲ漢字ニ改メヨ。

麥稈眞田
群れ遊ぶ
學問教育、普及。
衆生徒、模範、賞賛。
性質機敏、自信、念、勤勉、忍耐、乏シ、成功。

(1) ムギワラサナダ。

(2) ムレアソぶ。

(3) ガクモン、キョーイクのフキョーをはかるを要す。

(4) 太郎は、シューセイトのモハンとして、常にシューサ
ンせらる。

(5) 彼は、セイシツキビンなれども、ジシンのチンうすく
且キンベンニシタイの力にトボしければ、セイコーお
ぼつかなし。

二、次の文字を諸書し得るまで書け。

- 防禦 修繕 手桶 書籍 賣買
- 皇運 食料 野菜 馬齡薯 機嫌

帶封。賞賛。模範。自信。安神。
 普及。煮焚。文明の利器。娛樂。田舎。
 四通八達。朝。晚。不潔。傳染病。

第三節 綴方

一、左ノ漢字ニ似タルモノ、各々ニツ以上ヲ列記シ、且其音ト訓トヲ記セ。

柳。悔。穫。壤。傳。

二、次の語句中に誤れる文字あらば、之を適當なるものに改めよ。

- (1) 凱旋軍隊歡迎。
- (2) 勤險貯蓄。
- (9) 發物利用。
- (4) 車馬の住來織るが如し。

(5) 物に本未輕重あり。

三、次ノ文字ノ上又ハ下ニ任意ノ字ヲ附ケテ、或熟語ニツ以上ヲ作レ。

溫。公。圖。領。清。
 樹。記。威。全。肝。

四、次の口語を文語に改めよ。

わっこは、幼いときは、からだは弱くて、學校に通ふこともできなだったので、うちで、両親から、讀書、算術、習字などを教へられてゐたが、うまれつき、きよーでものを工夫するところが、好きであつた。

五、次の文を作れ。但し、文体は隨意なり。

- (1) 書生ハ儉約ト勉強トヲ貴ブ。
- (2) 實業學校ニ入ルノ理由。

(3) 約束を斷る狀。

第十四章

第一節 講讀

一、次の綴つづを讀よめ。

- (1) しよーこんしやに、さんけいす。
- (2) きしよーげきへんをおこして、ぼーふうごなる。
- (3) なごやは、あいちけんちよーのしよざいちなり。
- (4) みすばらしいこやをたて、むすめひごりご、かつかつ、このよををくってをるやもめがありました。
- (5) ちゅーせつ、れいぎ、しよーぶしんぎ、しっそは、ぐんじんのたからなり。

二、次ノ漢字ノ讀方及ビ解釋ヲ問フ。

淳 朴。 鱗次櫛比。 四通八達。 羨 望。

車馬絡繹。

大厦高樓。

靜 慮。

烹 殺。

芝 生。

佳 境。

山水明媚。

笠縫邑。

驅逐隊。

棹。

楫。

無雙の能書。

惡 臭。

契 沖。

蕃殖期。

紳 士。

霖 雨。

裨 益。

萬里觀光の客。

障礙を排す。

痴 鈍。

精 華。

服 膺。

井 然。

容貌秀麗。

威風凜烈。

財 祿。

偉丈夫。

厄介者。

奏 請。

人 爲。

月光閃々。

黎 明。

輔 弼。

要 訣。

三、次の句の讀方及び解釋を問ふ。

- (1) 兄弟は、骨肉の最も親しきものなり。
- (2) 我等は人生の春なり、漫りに時を失ふべからず。
- (3) 如何なる業務に就くとも、常に全力をつくして、忠實

弟……第

偉……緯
井然。

雙……双
裨……裨

に勤めざるべからず。

(4) 幸運は、常に勤勉なる人の側に傍ふこと、恰も順風穩波の航海に巧みなるものに隨ふが如し。

(5) 修養なき人は、一朝逆境に陥れば、懊惱煩悶、從容事を圖るに堪へず。

四、次ノ漢字ノ讀方ヲ問フ。

有明海。 筑紫平野。 觀學。 俳句。

運河。 輕氣球。 瀑布。 稅所敦子。

鳴越。 藤蔓。 笠置落。 國家安康。

華嚴。 鬼怒川。 苗代。 栃木縣。

五、次の文章の讀方及び附線の句の解釋を問ふ。

(1) 我國は、疆域の他邦に優る事にはあらねど、開闢以來一系の天皇を戴きて、東海の中に屹立せること數千歲

瀑布(瀧ノコト)

なり。

(2) あゝしばらくもはや槍先も見ゆるなりて候。殘多きは候へども、これまでにて候。御暇申すべし。さるにても、御名こそ承りたく候へ。

(3) 我等の郷土は、我等の生れたる地にして、父母のいますところ、親戚朋友のあるところなれば、我等は、この後ますく、おのれの智徳を磨き、この郷土の良民となりて、この地の繁榮をはからんことを欲す。

(4) 天使の如く柔和なる仁徳の光も、黒鐵の如く堅硬なる意志の力を以て、凍寒の冬に戦ひ、運搬の不便に戦ひ、大混亂大錯雜に戦ひ、かくて、呻吟、怒罵、汚穢、饑餓、惡疫を以て満ちたる戦地病院は、月を出でずして、清潔にして秩序整ひたる、あっぱれ、文明國の假病院に慙ぢざる

ものとなりぬ。女子の纖弱なる體軀は二十四時間の勞働に堪へて綽綽餘裕ありき。

(5) 萬里の長城は、屢々、修繕増築せられたりしかど、野蠻人の勢は非常に強く、かつ内地の亂れたるに乗じて侵入したりしかば、せppかくの長城も、つひに、その甲斐なかりき。かゝれば、國家の安寧は、たゞに、城の堅固なるのみによりて得らるゝにはあらで、おもに、國民の一致共同する力によりて得らるゝものなるを知るべし。

(6) 世には、農業を以て賤しき職業の如く思へるものあり。是大なる誤解なり。農業は、吾等が生活に必要な材料を作り出す業にして、實に、諸職業中の本源なるのみならず、農業に従事するものは、多く、野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、四肢の運動宜しきにかなふが故に

身体常に健全にして、長壽を保つことを得べし。ワシントンが、農は人の職業中、最も健全、最も高貴にして、最も有益なるものなりと云へるは宜ならずや。

(7) 汽船に乗りて、赤道直下の大洋にあり、見渡せば、水天相交る東の方には、棚引く雲、紫かゝれる紅の色を帯びて、入日の景色にも似たり。静けさ美しさめいじやうすへからず。さる程に、雲は、愈々、ゆらめきて、色は、愈々、紅となり、寄せ來る波は、一波ごとに、其のうねり漸く高し。やがて、太陽は、燦爛として、かゝやき出でたり。都會にては今頃は、ごうくとして、熱鬧の始まれる時刻なるべけれど、こゝ、大海原の眞中は、天地なほ眠れるが如く静なり。

始………初

第二節 書取

博識多才。

各自、名譽
保全、妨害
義務。

根、莖、葉
實、食ひ、養
分、吸取る、
作物。

一、次の片假名を漢字に改めよ。

(1) ハクシキタサイの人。

(2) 人は、カクシのメイヨを、ホゼンする権利に、他人のめいよをボーガイすべからざるギムゴを有す。

(3) 虫類の中には、子、クキ、ハ、ミなどをクヒ、或はそのヨーブンをスイトッて、サクモツを害するものあり、

二、次ノ文字ヲ諳書シ得ルマデ習へ。

- 賞罰 思召 着物 近江聖人 測候所
- 優勢 皇居 天祐 保全 葉 吸物
- 矯正 推薦 豆腐 大根 菓子
- 果物 訪問 寒暑 温暖 怪我
- 土産 物蔭 座敷 鳴居 分泌

經濟。 停車場。 教師。 官吏。 役人。

第三節 綴方

一、次の句の中にて誤りあらば正せ。

(1) 我等の薬み。

(2) いねの、まわりに、くわを、うるたり。

(3) きのは、生玉神社に、まいりたり。

(4) には、さりの、こねが、きこゑたり。

(5) いづれ日曜にはゆるく、御伺ひ申上げ候ふ。

(6) 萬障御操合せの上御光來の程奉侍候。

二、次の文を普通文に改めよ。

(1) 我が國に生れた男子は、たこひ、病身であつたり、籤に當らなかつたりして、陸海軍いづれの兵役にも服せぬものでも、満十七歳から四十歳までは、國民兵の兵籍に

あるものだから、國民皆兵のここになるのである。(記事體)

- (2) やうく暖かになりました。おかはりはございませんか。さて、わたくしは、この月で高等小學校第二學年の課程をへるはづでございますから、來月から御校の第一學年に入學いたしたいので、選抜試験の用意を致して置きたいと、おもひますが、ごんな事を調べておいたらよろしうございませうか、御手数でございますけれども、くはしい事を御知らせ下さいませ。(書翰體)
- 三、次の文を作れ。但し、文体は隨意。

- (1) 汽車。
- (2) 入學試験の模様を兄に知らする文。
- (2) 光陰惜ムベシ。

第十五章 (綴方作例)

第一節 口語體

◎春

四季
春夏秋冬

春は四季の始めでありまして、昔は曆ご合はせたもので一月を初春と稱へましたものです。然れども現今では大概三月から五月頃までを春と申します。この時分は、四季中最も時節の麗かなもので、また最も陽氣な好い折柄であります。寒かつた冬の後をうけて、萬物盡くよみがへり、草木も新芽を吹きますから、従て、野山は満開の花で、ひこしく美事に飾られます。若し、天氣朗かな日に、乗じ、部外なごを漫歩きいたしますと、誠に何ともいへない心持ちで、楽しく遊ぶここが出來ます。しかしながら、私ごもはまた最も大切なる時であります。

まして、一年中の最難關なる學年試験も入學試験も皆この頃でございます。

◎吾が家

吾が家は、この町外れにありまして、昔から古く續いた家柄だ。と申しますが、今では餘程古くなつて、軒や大屋根の上などには、所々に草生ひ茂り、さながら、我もの顔に古き歴史を語つて居る様で、何さなく趣があります。然れども家は廣く宏壯にして、平生私の書齋を定めて居ります。表座敷から、外面に見渡しますと、郊外田圃遠く開け、近く小川の水清らかに、牛馬はその間を三々五々さまよひ囁き、遙かの向ふには町家整然と櫛比して、工場の烟突はその間に林立しました。断へす黒烟を吹き出す邊り、汽車の音轟々として、笛聲かすかなるなご、眞に畫くこども能はざる眺めであります。私は

いつも此の景色に接しては、終日疲れた頭腦を慰さめて居ります。

◎衛生

衛生とは、日常の座臥居住について萬事清潔を貴ぶことを申します。昔し野蠻の時代なごにありましては、斯様にやかましいことはなかつた様であります。が、追々文明となり開化となるに従つて、世の中は次第に複雑となり、人口も稠密となり、ますから、第一にこの衛生といふことを重んじ守らねばなりません。彼の恐ろしき傳染病やら其他の病氣なども、皆之れを疎かにするから起るので、誠に大切なものであります。現今公共事業として、上水道やら下水道が出来て、井戸の水がやかましくなつたり、塵芥をむやみに捨てる事が出来んなど、皆公衆衛生の爲めで、最も肝要なものであります。

す。そのほか、個人の衛生としては、常に掃除を嚴重にして、汚物をためぬ様に心掛け、衣類、身体、清潔を貴びて洗濯入浴を缺がさぬ様、又、夜具、寝巻等の寝具は時に日光にさらすなご、十分に注意せねばなりません。

◎ 讀書のたのしみ

讀書は、未だ見聞せざることを、廣く知るばかりではなく、古今の英雄豪傑や聖人學者等と親しく交つて、恰も教へを受けられる様な利益があります。されば、私は常に讀書の愉快を感じまして、いろ／＼な新刊雜誌や書物を集めては、楽しく讀んで居ります。いたづらに、無益の遊戯にふけて、唯ふらく暮らすより、なんぼう利益で面白いが分りませんし、かしながら、書物の撰擇をあやまつては、かへつて不利益となりますから、之れはよく／＼注意せんといけません。私

は、多くの書物の中で、最も好んで居りますのは、古今の人物傳やら立志談でありまして、讀みながら、覺えず知らず泣いたり笑つたりすることが度々であります。

◎ 公園

公園と申しますのは、公共事業になつたもので、一般のため設けたものですから、人々は、茲處を自分の庭園とも心得て朝な夕なに楽しく散歩することが出来ます。西洋では、早くから萬事が整ふて居ましたから、随分設備のよくなつた立派な公園が多いさうですが、吾が國では、未だそこ迄は参りません。しかし、昔から有名なのは、岡山の後樂園、金澤の兼六公園、高松の栗林公園でありまして、之れを日本の三公園と申しますが、その他にも、東京の上野公園、奈良公園等著名なものであります。我國の公園も、昔の城址でありまして、中

央には天主臺が残つて居まして、老杉古松あたりを蔽ひ、四時の眺めも殊に勝れて居ますから、集まる人の絶間がありません。

第二節 書翰體

◎入學試験期日を問合す文

寒かつた冬も一日一日に薄らぎ行き、追に好い時候となり、さすが御きげんよく益御勉強の事よろこんでゐます。私も、もはや當地高等小學第二學年を終らんといひますので、來る四月からは、御地の中學校へ入學いたしたく、既にその準備にこりかゝり、一生懸命になつて勉強いたし居ります。就ひては、入學試験期日はいつ頃でありますか、實は受験のために參るべき仕度もあります。ここで、心配になつてたまりませんから、若しお分りになつて居りますれば、誠に

御手数では御座いますが、ちよつと御知らせ下さいませ、お頼みいたします、左様なら。

◎書籍を注文する文

拜啓、益々御盛大の事ご奉賀候、就ひては、私事、中學校の入學試験に應じたく、目下勉強中に有之候處、参考書として必要なる國語字解上下二冊共に、生憎當地の書店に品切れなる相成居候、誠に困却致し候間、乍御面倒右二冊小包郵便を以て至急御送り下され度く、代金は小爲替券として封入致し置き候に付、御受取相成度右御注文申上候早々

◎友人の病氣を見舞ふ文

拜啓、承り候へば、貴兄には先日より御病臥の由、誠に驚き入り候、實は此の三四日引續き御欠席相成居り候に就ては、平素の御勉強に似合はざるこそ、折角不審に存じ居り候故

その中一度は御様子伺ひのため參上致へき心組に御座候次第、失禮のだんは何卒不惡御思召し下され度候、この上は學業より身體こそ大切と存じ候故、學校の方へは御心配無之、充分御療養の程肝要にて、一日も早く御全快祈り上げ候、雞卵は常から貴兄の好物にもあり、旁些少なから御見舞の印迄に呈上仕り候故、御受納下され度、何れ參堂致すべく候へ共、先はごりあへず御見舞までかくの如くに御座候不

◎ 恩師に入學試験の模様を知らする文

拜呈仕り候、偕て兼に思ひ立ち居り候入學試験も愈昨日を以て全部終了致し候間、先づ以て御安心下され度候、此度の試験は志願者五六百名の事に候ひしに、實際は甚だ多く、凡そ八百名も有之益責任の大なるを相さごり申し候、私

尙

は三百四十五番にて第二試験室に入れられ候處、恰も吾が校の者ご二三番離れて着席仕候大層都合よく御座候、試験は二日間にて前日は讀方と算術有之二日目に綴方書方の順序にて施行せられ候、各科とも幸ひに先生の厚き御教示に預り候事とて案外みやすき心地仕り、此の分なれば、八百名中募集定員二百名の内へ入らるべきかご心窃かに喜び居り候、これごごく先生の御かげと存じ厚く御禮申上候、何れ二三日の後には花々しく歸郷仕りその上にて尙許しく申上度く、先は取りいそぎ模様御報知迄如此御座候頓首

◎ 花見に友を誘ふ文

春暖日に日に相加はり、最早郊外は花笑ひ鳥歌ふの好時節となつたが、貴兄は相變らす書物と親しんで、内にばつかり

閉ちこもつて居るだらうが、それでは却て身体の健康を害するのみならず、百花らんまん、好季にさいし、いたづらに見のがすは、宜ろしからんこと、思ふから、幸ひ来る日曜日を期して、一日の清遊を嵐山に試みたら、ごうだか、實は彼の地の友人からも有名なる櫻は、今頃が見ごき故、是非來る様に申も越しあるから、雨天ならざる限りは、必らず行くことにしやうぢやないか、兎に角君の返答次第で、その他の準備を打合すことにしやう、先は右御誘ひまで、左様なら。

◎約束を斷る文

至急申上候、偕て明日は御同道にて奈良旅行いたすべく、御約束致し居り候處、實は兄上こと昨夜より俄かに發熱いたされ候ひしも、今朝ごもならば大變のことはあらずご存じ居り候處、事實は反對にて益重態に趣き、父上始め一同心配

いたし居り候間、誠に相濟まず候へ共、明日は御供いたし難く候故、あしからず御思召しの上、他日を御期し下され度、先は御斷り迄如此候不一。

第三節 記事體

◎朋・友

勅語にも、朋友相信じごあれば、友人間は互に親しく交らざるべからず、然れども、水は方圓の器にしたがひ、人は善惡の友によるごいへば、よくくその善惡をねらばざるべからず。善き友は互に惡しきをいましめ、難儀を助け、善をすゝめ、學を研き、終始かはらず、異身全体なるべし。惡しき友は、なるべく親しからざる様に交り、事毎に排斥するをよしとす。然るに、益ある友は、すべて父母兄弟に次ぐ相談相手ともなりぬるを、兎角きらひて遠からんごするは、大なるひがごご、

いふべし。

◎ 光陰惜むべし

時は黄金なりといへる諺あり、以てその如何に貴重なるやを知るべし。然るを世には、時間の空費を少しも顧みざる者ありて、徒らに、時の過ぐるを知らざるもの、如し。實に、光陰は矢の如し、この古語に違はず、昨日は既に今日となり、何日しか知らぬ間に、過るものなれば、吾等は此の時に於て、充分勉強研究せざるべからず、若し、無益に少年時代を經過すれば、老て後には及ぶべからず。然れば、古今の大發明者又は大學者と稱さるゝ者、或は巨萬の富を重ねたる者等、何れも一寸の光陰を惜しみ、時間を利用したるに他ならず。豈思はざるべけんや。

◎ 梅

梅は、百花に先だつて、獨り雪中に花を咲かし、その清香を放つに依て多くの人々に愛翫せらる。その花は白色單瓣のもの多く、その他、紅梅、黃香梅、銀梅等十數種あり、何れも、優美にして人に觀賞せらるゝのみならず、五月頃に至れば實を結びて、人の食用となる。之れを梅干と稱して、廣く一般に供用せられ、益する所甚だ多し。斯くの如く、花實共に賞せらるゝもの、また他に無し。宜なるかな、松竹の常盤を變へざるに比し、松竹梅三人々の呼び稱ふるを。

◎ 父 母

父母は吾等を生み、吾等を育てられたる者にして、その恩は海よりも深く、山よりも高く、天地間にたこふる物なし。然れば、父母に孝養を盡くすは、人間の第一行為にして、古語にも孝は百行の基とあれば、吾等は精神誠意を以て、父母に仕へ、鴻

◎ 甲数を乙数に掛けた積を甲掛乙乗と云ふ。乙数を甲数に掛けた積を乙掛甲乗と云ふ。二つの掛けた積を併せて掛けた積と云ふ。併せて掛けた積を併掛積と云ふ。併掛積を併掛積と云ふ。併掛積を併掛積と云ふ。併掛積を併掛積と云ふ。

- (イ) 45240843 - 39998276
- (ロ) 0.8524 - 0.7867
- (ハ) 10 - 2.369367

(7) 被乗数、乗数及び積とは如何

(8) 次の各題の積を求めよ。

- (イ) 52368×9 (ロ) 5238×700
 - (エ) 54353×768 (ニ) 42300×86000
 - (ホ) 4236×5.542 (ヘ) 7.5038×0.057
- 例 (イ)
$$\begin{array}{r} 52368 \\ \times 9 \\ \hline 471312 \end{array}$$
 答 471312
- (ロ)
$$\begin{array}{r} 5238 \\ \times 700 \\ \hline 3666600 \end{array}$$
 答 3666600

- (イ)
$$\begin{array}{r} 54353 \\ \times 768 \\ \hline 434824 \\ 326118 \\ 380471 \\ \hline 41743104 \end{array}$$
 答 41743104
- (ロ)
$$\begin{array}{r} 42300 \\ \times 86000 \\ \hline 2538 \\ 3384 \\ \hline 3637800000 \end{array}$$
 答 3637800000

(注意) 小数と整数或は小数と小数との積を求むるには、普通の乗法の如くし、積の小数点以下の桁数をして、被乗数、乗数の小数点以下の桁数の和に等しからしむべし。

- (イ)
$$\begin{array}{r} 4236 \\ \times 5.542 \\ \hline 8472 \\ 16944 \\ 21180 \\ \hline 23475.912 \end{array}$$
 答 23475.912
- (ロ)
$$\begin{array}{r} 4236 \times 0.002 \\ 8472 \times 0.04 \\ 16944 \times 0.5 \\ \hline 21180 \\ 21180 \\ \hline 23475.912 \end{array}$$
 答 23475.912

(*) $875 + 0.025 = (875 \times 1000) + (0.025 \times 1000)$
 $= 875000 + 25$
 $= 35000$ 答 35000

(^) $20.354 \div 7.43 = (20.354 \times 100) \div (7.43 \times 100)$
 $= 2035.4 \div 743$
 $= 2.7 \dots \dots$ 餘 γ 0.293 答(商) 2.7 答(餘) 0.293

(*) 及び (^) は實際は次の如くす。

(*) $0.025) 875$
 $\underline{75}$
 $8125) 875000 (35000$
 $\underline{75}$
 125
 $\underline{125}$
 0
 答 35000

(^)
 $7.43) 20.354$
 $\underline{743} 2035.4 (2.7$
 $\underline{1486}$
 5494
 $\underline{5201}$
 293
 餘 γ 29.3 + 100 = 0.293
 答(商) 2.7 答(餘) 0.293

(12) 次の各題を計算せよ。

◎名数の種類は同類のものにあらざれば、加法及び減法を行ふことを得ず。同種類に於ては、単位が異なるも、単位を同じにして計算する。位置は直して、後位の計算をする。

(ホ) 300 匁
 $0.04 \text{ 貫} = 40$
 $1.5 \text{ 貫} = 1500$
 $\underline{\quad\quad}$
 1840 匁

(13)

次の各題の和を求めよ。

- (イ) $216398 \div 7$ (ロ) $6705.54 \div 9$
 (エ) $700340 \div 6$ (ニ) $915.73 \div 5$
 (キ) $276672 \div 352$ (ヘ) $6263.7377 \div 1453$
 (ク) $84572603 \div 2942$ (ト) $3463.45 \div 473$
 (コ) $1885336 \div 74.08$ (チ) $2766078 \div 0.3045$
 (ケ) $536.28 \div 1.23$ (ツ) $30.71 \div 0.37$
 (カ) $9.36 \div 1.48$ (チ) $23.45 \div 0.246$
- (イ) 3476 尺
 7509
 $\underline{+ 2334}$
 (ロ) 3.207
 9.4535
 $\underline{+ 18.0605}$
 (ヘ) 48.05
 3.204
 4.3726
 9.15
 $\underline{+ 30.6}$
 (ニ) 1.4682
 0.947
 29.008
 0.033
 $\underline{+ 0.5269}$
- (*) $300 \text{ 匁} + 0.04 \text{ 貫} + 1.5 \text{ 貫} = ?$
 (^) $7.8 \text{ 斗} + 5.6 \text{ 石} + 9.3 \text{ 升} + 2.004 \text{ 石} = ?$

◎式の計算
 ①加減の符
 ②乗除の符
 ③加減乗除
 ④括弧の有無
 ⑤計算の順序
 ⑥計算の順序
 ⑦計算の順序
 ⑧計算の順序
 ⑨計算の順序
 ⑩計算の順序

20) 百二十個入にて一箱貳圓五拾五錢の林檎一個の代は何程に當るか。但し箱代は拾五錢に當る。

圖 $22\text{錢} \times 15 = 330\text{錢}$ 所要の價
 答 3圓30錢

圖 $255\text{錢} - 15\text{錢} = 240\text{錢}$ 120個の代價
 $240\text{錢} \div 120 = 2\text{錢}$ 所要の代價
 答 2錢

第三章

(1) 次の結果を求めよ。

- (イ) $475 - 135 \div 5 + 23 \times 24$
 (ロ) $10.1007 \div 2.9 + 42.6 \times 7 - 100$
 (ハ) $7.22 \div 2 \div (2.6 - 1.6) + 0.15 \times 1.2$
 (ニ) $[10000 - (384 + 495 \div 3) \times 8] \times 7 \div 56 - 11 \times 3$

④計算すべき
 ③括弧が二
 ②三重にな
 ①内部の括弧は
 ⑤計算すべし。

圖 (イ) $475 - 135 \div 5 + 23 \times 24$ 連算

$$\begin{array}{r} 5 \overline{) 135} \\ \underline{5} \\ 27 \\ \underline{27} \\ 0 \end{array} \quad \begin{array}{r} 475 \\ \underline{- 27} \\ 448 \\ \underline{ 24} \\ 1000 \end{array}$$

答 1000

(ロ) $10.1007 \div 2.9 + 42.6 \times 7 - 100$

$= 3.48 + 298.2 - 100$

$= 301.68 - 100$

$= 201.68$

答 201.68

(ハ) $7.22 \div 2 + (2.6 - 1.6) + 0.15 \times 1.2$

$= 7.22 \div 2 + 1 + 1.8$

$= 7.22 - 2 + 1.8$

$= 7.02$

答 7.02

(注意) (イ)の如く

連算をすべし

ものとする。以

下省く。

$$\begin{aligned}
 (*) & [10000 - (384 + 495 + 3) \times 8] \times 7 + 56 - 11 \times 3 \\
 & = [10000 - (384 + 165) \times 8] \times 7 + 56 - 33 \\
 & = [10000 - 549 \times 8] \times 7 + 56 - 33 \\
 & = [10000 - 4392] \times 7 + 56 - 33 \\
 & = 5608 \times 7 + 56 - 33 \\
 & = 39256 + 56 - 33 \\
 & = 701 - 33 \\
 & = 668
 \end{aligned}$$

答 668

(2) 次式の計算をなせ。

$$\begin{aligned}
 (イ) & 1 - 0.0084 + 2.536 - 0.036 - 0.421 - 0.3 \\
 (ロ) & 547.77 \div 9.3 - (26 + 3.45) \times 2 \\
 (ハ) & 42385 \times 9 - 1 \\
 (ニ) & 17.38 \times 4 \times 1.5 \div 6 + 2.62 - 20 \\
 (ホ) & 1375 \times 3 \div 15 - (139 \times 21 + 37 \times 83) \div 1198
 \end{aligned}$$

- (イ) $(11.16 \div 2.4) \div 9.3 \div 15) - 0.24 \div 0.032$
 (ロ) $(1.6 \div 2.5) \div (1.6 \times 0.4) \div (12.5 - 62.5 \div 5)$
 (ハ) $534 - \{(3146 - 132 \times 13) \div 65 + 49 \times 8\}$
- (3) 米一斗五升と二斗と三斗七升五合との和は何程なるか。
- (4) 或文具店に於て、その所有の鉛筆七十五打の中、三十八打を賣り、後四十三打を買入れたりといふ。現在の所有の打數何程なるか。
- (5) 一生徒あり。金拾貳錢五厘にて墨を買ひ、六錢八厘にて紙を買ひ、五錢五厘にて筆を買ひ、六錢にて鉛筆を買ひ、壹圓札にて支拂ひをなせりといふ。この釣錢如何。
- (6) 或人六十里の道を始め若干里行き、それより十二里進みしに、丁度中央の所に達せりといふ。この人、始め行きし

◎十五ノ
ト一止
船とは毎
十の進む
船のこ
り

- 里數はは何程なるか。
- (7) 軍艦扶桑の長さは約二百二十尺、鎮遠はこれより八十尺長く、朝日は更に鎮遠より百尺長し、鎮遠朝日の長さは各々何尺なるか。
- (8) 或汽船の速力は二十三ノットなりといふ。この汽船が一晝夜航行すれば、何程進むか。
- (9) 甲乙二人が同時に同所を出發して、反對の方向に進むに、毎時甲は一里半、乙は一里なりといふ。然らば、この二人が出發してより三時の後相離るゝ距離如何。八時間の後には如何。
- (10) 舟夫あり。一河を遡るに、毎時十五町を上ぼれりといふ。今この水流を二十八町とすれば、この人の平水を漕ぐときの毎時の速さ如何。また、下るべきの毎時の速さ如何。

◎間口とは
宅が道路
に沿ふ方を
さいひ、否
ざらざるも
奥行といふ

- (11) 八千八百二十四に何程を加ふれば、一萬五千となるか。
- (12) 密柑九千六百五十二個を百二十個入りの箱につむれば、幾箱を要するか。又、残りは何個あるか。
- (13) 或數の六倍と八倍とは、或數の何程となるか。
- (14) 某數の八倍より某數の三倍を引けば、某數の何倍となるか。
- (15) 間口十間、奥行二十四間の宅地あり。この周圍に板圍をなすに、一間につき壹圓四拾五錢かゝるといふ。この總費用は何程なるか。
- 圖 (10間+24間)×2=68間 宅地の周圍
145錢×68=9860錢 所費の費用
略 98圓60錢
- (16) 或人金貳圓八拾錢を所持し、買物のために壹圓六拾五

◎一匹とは
二反のこと
なり。

- 錢を費し、その後、に貳圓參拾錢を貰ひ、貳圓八拾錢の買物をなせしといふ。現在の所持金如何。
- (17) 一反拾五圓六拾錢の縮緬一匹の價何程なるか。又二十四匹の價は如何。
- (18) 石油一升の價貳拾錢なるときは、毎夜二合五勺づつを消費する家にては、三十日間に何程の石油代を要するか。
- (19) 井戸の深さを測らんとし一七、五尺の繩を下したるに届かず一五、八尺のものを足したるに五、七尺餘れりといふ。然らば、この井戸の深さ如何。
- (20) 玄米二十九俵を金百五拾貳圓貳拾五錢にて買入れ、一俵につき運賃參錢づつを拂ひ、また、搗賃總計參圓六拾八錢を拂ひ、之を白米とせしに一俵を減ぜりといふ。白米一俵の代金を何程にせば損益なきか。

第四章

(1) 四捨五入につき知る所を語れ。

◎次の數を小數四位まで取り、以下を四捨五入せよ。

(1) 56.84723
 (2) 56.84723
 (3) 6.742321
 (4) 7.5365452
 (5) 7.5365452
 (6) 8.24357
 (7) 8.24357
 (8) 0.002032
 (9) 0.002032
 (10) 0.002032
 (11) 0.548961
 (12) 0.548961
 (13) 0.5490
 (14) 0.5490
 (15) 0.5490
 (16) 0.5490

小數四位まで取り、以下を四捨五入せよ。○は省くべからず。

- (2) 次の商を四捨五入によりて、小數第三位まで求めよ。
- (ア) $2768 \div 9 = ?$ (イ) $96.848 \div 143 = ?$

(ハ) $0.598 \div 0.49 = ?$

(3) 次の計算をなせ。

(ケ) $17.745 \div 3.07 + 1365 \times 0.025 - 26.4928$

(コ) $(7.5764 + 2.4236) \times 5 - 69.174 \div 25.62$

(カ) $72.54 \times 4 \div 0.9 \times 7 + 5.821 - 6.0019$

(4) 加賀の白山はその高さ八千九百四十七尺、駿河の富士山は白山より高さこと三千四尺二十三尺。また、臺灣の新高山山は富士山より四百八十尺高し。富士山と新高山の高さは何尺なるか。

(5) 幾何なる數を二百五十三除すれば、三百七十八となるか。

(6) 2049840 を幾何なる數にて除すれば、その商が 234 となるか。

◎一匹とは二反のことなり。

(7) 一反の價五拾九錢八厘の木綿一匹の價は何程なるか。又三十五匹の價は如何。

(8) 二八・五升にて四圓貳拾七錢五厘の米一升の價如何。

(9) 或學校の學級數は十二にして、一學級の生徒の數は平均三十八人なるときは、生徒の總數如何。

(10) 酒 270.42 石を一樽二斗六升入に詰むれば幾樽を要するか。また、一樽未滿のはしたは、何程にして一樽には何程不足なるか。

(11) 一ヶ月に三十五枚づゝの紙を費さば、七百枚を費すには、何ヶ月かゝるか。

(12) 壹圓にて八帖の美濃紙は五圓にて何帖買ひ得るか。又參圓五拾錢にては如何。六拾貳錢五厘にては如何。

(13) 一反五圓六拾錢の紬三十四反と、一反九圓七拾四錢の

絹二十一反を買ひ、金參百六拾圓だけ支拂へりといふ
尙何程支拂ふべきか。

(14) 次の計算をなせ。

(イ) $16.0176 + 21.3 =$ (ロ) $0.01623 \div 0.028 =$

(ハ) $9.85 \times 74000 =$ (ニ) $6.57 \times ? = 5104.89$

(ホ) $210 \times 97 \times 6 =$ (ヘ) $3.1416 \times ? \times 15 = 376.992$

(15) 鉛筆五百本を若干人に分與せんとするに、一人に付三十本づゝとすれば、四十本不足すといふ。その人員幾何なるか。

(16) 三十五里を二時間に駛る汽車は五時間半には、何程駛るか。

(17) 縦八寸横六寸の長方形の紙片の面積は幾平方寸あるか。

◎長方形は縦と横の長さを表す。面積は縦と横の積に等しい。面積の単位は平方寸である。

◎正方形の面積を求めるときは、その一辺の長さを二乗して、その積を求めよ。

(18) 正方形の宅地の一辺の長さが五間あるときは、その面積は幾坪あるか。

(19) 矩形の地面あり。縦は十八間にして、横は九間半なり。といふ。その面積を求めよ。

(20) 長方形の紙片の面積が五十六平方寸にして、縦が八寸なり。といふ。横は幾寸なるか。

(21) 五平方尺と五尺平方との區別を問ふ。

圖 五平方尺とは一平方尺のものが五つ集まりたるものにして、五尺平方とは、一辺の長さが五尺なる正方形のことにして、 (5×5) 平方尺 = 25 平方尺 に等し。

第五章

(1) 或數の五倍半が六十六ならば、或數は何程のことなるか。

◎一本打は十
二本のこと
なり。

- (2) 次の計算をなせ。
- (一) $18.07\text{石} \times 24$ (二) $3.1416\text{尺} \times 500$
- (一) $2087\text{圓} \times 5.07$ (二) $59.8\text{斤} \times 44.5$
- (3) 一本參錢七厘の鉛筆一打の價は何程なるか。また二十七打の價如何。
- (4) 次の結果を求めよ。
- (一) $0.472 \div 0.04$ (二) $0.02254 \div 0.92$
- (一) $1.2126\text{尺} \div 2.58$ (二) $2.0776\text{石} \div 0.28\text{石}$
- (5) 大工あり。一日の賃錢金八拾五錢にして、若干日働きて、金拾八圓七拾錢を得たりといふ。働きたし日數如何。
- (6) 二斗八升五合が四圓貳拾七錢五厘なる米五升五合の價は何程なるか。
- (7) 一斗の價四圓の酒と、一斗二升五合の價六圓貳拾五錢

◎一尺は常尺の
一尺に當り、五
分一尺に當り、
常尺の一角、八
寸三分に當り、
寸三分に當り、
面底は角形の
高さの半分、
積の半分、
等積の平行四
邊形の面積は
底邊の平方に
等しい。

- (10) 酒とは、壹圓につき各何升に當るか。
- (8) 甲乙二人が同時に同方向に同所を出發せり。毎日甲は十一里、乙は八里半づゝ歩むといふ。然らば、十八日間歩行を續けば、乙は甲より何程後れるか。
- (9) 上の問題に於て、同時に反對の方向に出發せば、甲と乙との距離は何程なるか。
- (10) 鯨尺の五尺は、常尺(曲尺)の何尺に當るか。
- (11) 鯨尺にて二丈八尺の反物は常尺にて何程あるか。
- (12) 常尺の十尺は鯨尺の何程に當るか。
- (13) 常尺の二丈五尺は鯨尺にて示せば何程あるか。
- (14) 底邊六尺、高さ四尺の三角形の面積は何程あるか。
- (15) 底邊三尺、高さ八尺の平行四邊形の地面の面積は幾平方尺あるか。

◎一週間は七日のことなり。

- (9) 二百五十八里を隔つる両府より甲乙二人同時に相向つて出發し、毎日甲は十二里、乙は九里半を行くことせば、一週間の後二人の相距ること幾里なるか。又幾日にして相會ふか。
- (10) 甲乙二人の脚夫あり。毎時甲は三十五町、乙は二十八町進むといふ。今乙が出發してより二時の後、甲が乙を追ふときは何時間にして追付くべきか。
- (11) 一丈八尺四寸の絹糸を二つに切り、長き方を短き方よりも二尺六寸だけ長くせんには、各幾何づ、にすればよきか。
- (12) 讀本一冊と算術書一冊との價合せて參拾錢にして、讀本は算術書より六錢高しといふ。各一冊の價如何。
- (13) 金百參拾八圓を甲乙丙の三人に分ち與ふるに、甲は乙よりも五圓多く、乙は丙よりも八圓多く與へたりといふ。各々の取り前は、何程なるか。
- (14) 三男四女ともに働きて、合計五圓の賃錢を得たり。各一人の賃錢は何程なるか。但し、男一人の賃錢は、女一人の賃錢の二倍なり。
- (15) 縦八寸、横九寸、高さ二寸なる直方体の體積は幾立方寸あるか。又幾立方分あるか。
- (16) 三立方尺と三尺立方との區別を問ふ。
- (17) 體積二百八十八立方寸、長さ八寸、横九寸なる直方体の高さは幾寸あるか。

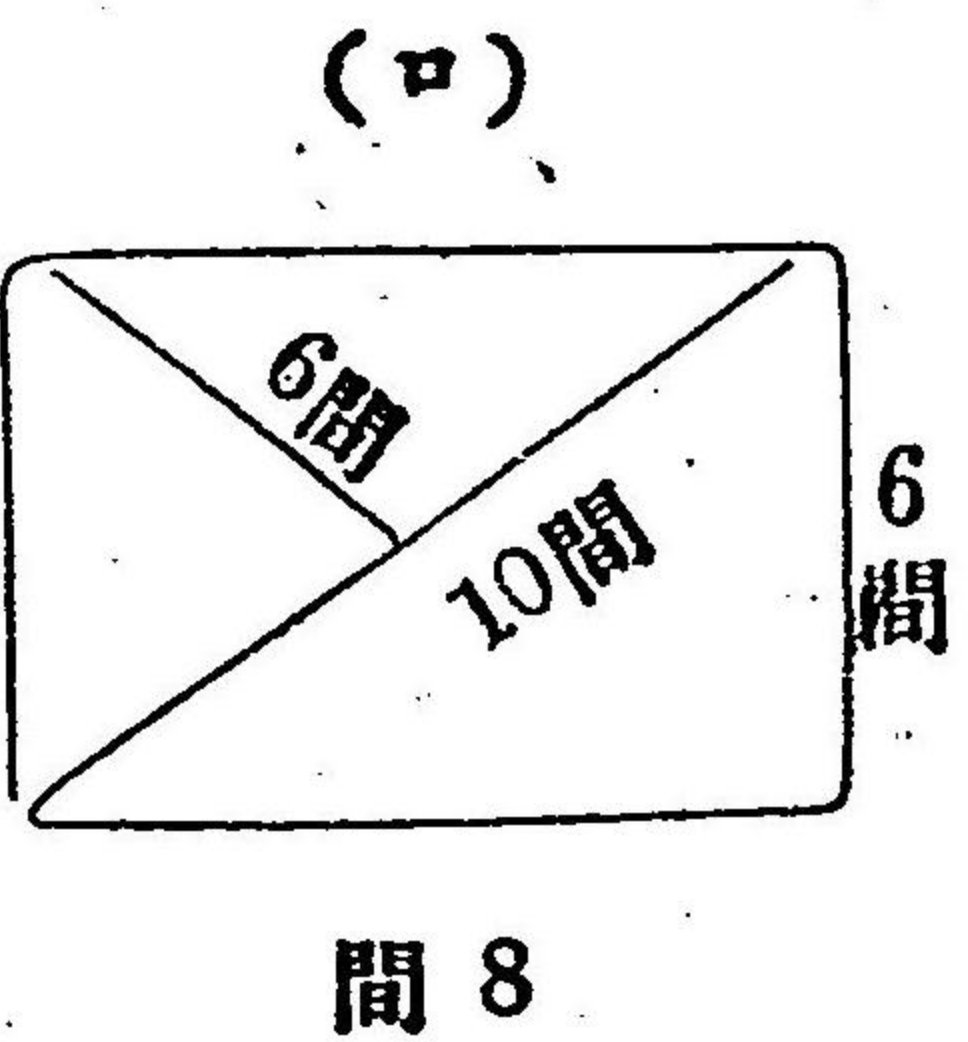
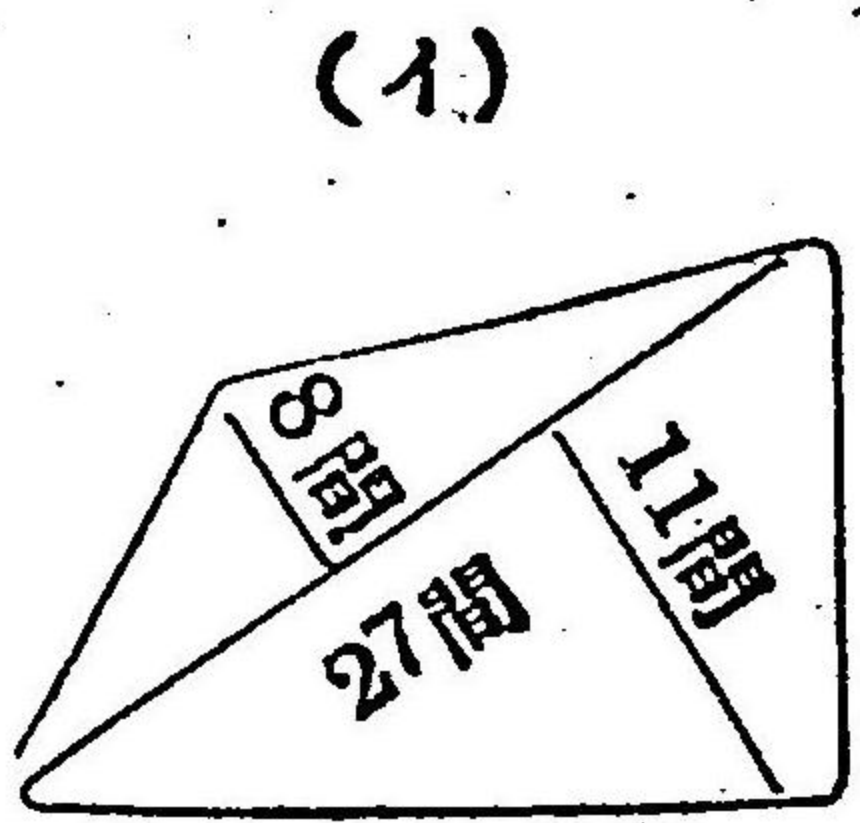
◎直方体の體積は、縦の横と高さとの積を求めよ。すなわち、 $縦 \times 横 \times 高さ$ 。

- (1) 次の計算をなせ。

第七章

◎立方体の積は長さの三乗を求めむ。◎角柱及び圓柱の積は底面積に高さの積を求めん。◎錐体の積は底面積に高さの積を掛し三除す。◎球の積は半径の三乗を掛し四倍を掛し三除す。◎四面体の積は底面積に高さの積を掛し三除す。

- (1) $29.67 + (33.42 + 30 + 4.82)$
- (2) $(7.5 + 2.05) \times 0.06 + 2 + 2.51 \times 85$
- (3) 一邊の長さ四尺五寸の立方体の石あり。その体積は幾立方寸あるか。又幾立方尺あるか。
- (4) 五角柱の底面積が六平方寸にして、高さが七寸ある木片の体積を求めよ。
- (5) 底面の半径は二尺にして、高さ四寸の圓柱の側面積、全面積及体積如何。
- (6) 底面の半径二寸、高さ五寸の圓錐体の体積を求めよ。
- (7) 半径三尺の球の積は幾立方尺あるか。また、幾立方寸あるか。
- (8) 次の四邊形の面積を求めよ。



◎才は一方一尺に等し。

◎一升の体積は $\frac{648}{27}$ 立方分に等し。

- (8) 長さ一尺五寸、幅二尺三寸、高さ四尺なる荷物の体積は何才あるか。
- (9) 縦五・五寸、横六寸、高さ七寸の直方体と六寸立方の立方体との体積は何れが何程大なるか。
- (10) 内法、縦九・八寸、横一四・七寸、高さ一三・五寸の箱には何斗の米を入れ得べきか。
- (11) 圓筒形の酒桶の内法の直径が五尺、深さ五尺四寸なり。然らば、此桶の容積は何石何斗何升何合何勺あるか。

- (12) 或數は四十五の九倍に當るといふ。その數を求めよ。
- (13) 兒童三人の体重を測りしに、甲は七・三二貫、乙は八・四一貫、丙は九・二三貫ありしといふ。平均一人の体重を求めよ。
- (14) 或人一石拾貳圓の米百二十八石を賣り拂ひ、その代價にて、一石八圓の麥を買入れしといふ。買ひ入れし麥の石數を求めよ。

(15) 次の掛け算の運算の□と●と△を求めよ。

$$\begin{array}{r} \Delta 6 \\ \times 87 \\ \hline 252 \\ 208 \\ \hline 3102 \end{array}$$

(16) 松杉兩樹の林あり。松は杉の九倍半にして、其差は四百二十五本なりといふ。各何本なるか。

- (17) 或職工が七日と二時間働きて賃錢四圓參拾貳錢を得。また五日間働きて賃錢參圓を得たりといふ。然らば、一日の就業時間如何。
- (18) 一斤五拾參錢の茶六十斤と一斤七拾五錢の茶三十五斤とを混合し、之を一斤六拾五錢に賣らば、此損益金幾何。
- (19) 紬二反の價は、木綿七反の價に等し。而して、木綿一反の價は四拾六錢なり。然らば、紬一反の價如何。
- (30) 或人拾參圓八拾錢を貳拾錢銀貨と五錢白銅貨にて受取りしに、貳拾錢銀貨は五十個ありしといふ。五錢白銅貨の個數幾何。

◎二つ或は
単位の以上
の表したる
名を諸等
て或は復
名を拾ふ
例へば拾五
圓五拾錢五
十圓五拾錢
町六間四尺
の如し
◎諸等通法
とは諸等法
を單名數に
化する方
法にして、
法とは單名
數を諸等名
に化する方
法をいふ

- (1) 諸等數とは如何。
- (2) 諸等通法及び命法とは如何。
- (3) 次の名數をその附記せる()の中の單位の單名數に直せ。

(イ) 十八里二十七町六間三尺(尺)

圖 一里は三十六町に等しきを以て三十六町を十八倍して町に直すに六百四十八町となるを以て、これに、二十七町を加ふれば六百七十五町となる。一町は六十間なるを以て、六十間を六百七十五倍して間に直せば四万五百間となる。これに、六間を加ふれば四万五百六間となる。一間は六尺なるを以て、六尺を四万五百六倍すれば二十四万三千三十六尺となる。これに三尺を加ふれば二十四万三千三十九尺となる。これ、所要の結果なり。

實際は次の如くす。

1里 = 36町
1町 = 60間
1間 = 6尺
1尺 = 10寸
1寸 = 10分

1町 = 10段
1段 = 10畝
1畝 = 30步
1步 = 10合
1合 = 10勺

運算

里	町	間	尺
18	27	6	3
×36	+648	+40500	+243036
108	675	40506	243039
54	×60	×6	
648(町)	40500(間)	243036(尺)	答 243039(尺)

(ロ) 三町八段五畝二十五步(步)

運算

町段畝	步
3	25
×30	+11550
11550(步)	+11575
	答 11575步

(ハ) 一日十五時二十六分三十五秒(秒)

運算

◎田畑山林に
等測るに
は町段用
歩合を
ひ市街宅
の坪測る
に坪測る

1日=24時
1時=60分
1分=60秒
1年=12ヶ月 = { 平年365日
閏年366日

日	時	分	秒
1	15	26	35
$\times 24$	$+ 24$	$+ 2340$	$+ 141960$
24(時)	39	2366	141995
	$\times 60$	$\times 60$	
	2340(分)	141960(分)	答 141995秒

(二) 四里二十三町十五間(里)

■ 60)15間 36)23.25町(0.645(里))

216	165
144	144
210	210
180	180
30	30

答 4.645里強

(ホ) 二町三段四畝十五歩(畝)

■ 2町3段4畝15歩 = 234畝15歩

30) 15歩 答 234.5畝

(ヘ) 三日十七時二十四分三十六秒(日)

■ 60)36秒 60)24.6分 24)17.41時(0.7254(日))

168	168	48
61	61	48
130	130	130
120	120	120
100	100	100
69	69	69
4	4	4

答 3.7254日強

(4) 次の名數を各その附記せる()の中の單位の單名數にて示せ。

- (イ) 十八里三十町四十二間(間)
- (ロ) 五里十八間一尺(尺)
- (ハ) 十九町四十五間(町)

第八章

(1) 諸等數とは如何。

(2) 諸等通法及び命法とは如何。

(3) 次の名數をその附記せる()の中の單位の單名數に直せ。

(イ) 十八里二十七町六間三尺(尺)

◎二つ以上の名に
 單位の以上は
 表したるに
 名を諸等
 或は複名
 數といふ
 例へば拾五
 圓參拾錢
 十兩拾錢
 五兩拾錢
 町六間四尺
 の如し
 ◎諸等通法
 とは諸等數
 を單名數に
 化する方
 法にして
 命法
 法とは單名
 數を諸等數
 に化する方
 法をいふ

圖 一里は三十六町に等しきを以て三十六町を十八倍して町に直すに六百四十八町となるを以て、これに、二十七町を加ふれば六百七十五町となる。一町は六十間なるを以て、六十間を六百七十五倍して間に直せば四万五百間となる。これに、六間を加ふれば四万五百六間となる。一間は六尺なるを以て、六尺を四万五百六倍すれば二十四万三千三十六尺となる。これに三尺を加ふれば二十四万三千三十九尺となる。これ、所要の結果なり。
 實際は次の如くす。

圖 算

里	18	町	27	間	6	尺	3
	X 36		+ 648		+ 40500		+ 243036
	108		675		40506		243039
	54		X 60		X 6		
	648(町)		40500(間)		243036(尺)		答 243039(尺)

(ロ) 三町八段五畝二十五歩(歩)

圖 算

町	3	段	8	畝	5	歩	25
	X 30		X 30		X 30		
	90		240		150		750
	11550		11575		11575		答 11575歩

(ハ) 一日十五時二十六分三十五秒(秒)

圖 算

1里 = 36町
 1町 = 60間
 1間 = 6尺
 1尺 = 10寸
 1寸 = 10分

1町 = 10段
 1段 = 10畝
 1畝 = 30歩
 1歩 = 10合
 1合 = 10勺

1歩 = 1帖

◎田畑山林に
は、町段、畝
歩、合、市、街、宅
の、等、を、測、る
地、坪、合、勺、を、用
に、は、ふ、を、用

1日=24時
1時=60分
1分=60秒
1年=12ヶ月 = { 平年365日
閏年366日

甲	時	分	秒
1	15	26	35
$\times 24$	$+ 24$	$+ 2340$	$+ 141960$
24(時)	39	2366	141995
	$\times 60$	$\times 60$	
	2340(分)	141960(分)	答 141995秒

(二) 四里二十三町十五間(里)

■ 60)15間
0.25(町)

36)23.25町(0.645(里))

216	165
144	180
210	30
180	
30	答 4.645里強

(ホ) 二町三段四畝十五歩(畝)

■ 2町3段4畝15歩=234畝15歩

30) 15歩
0.5畝 答 234.5畝

(ヘ) 三日十七時二十四分三十六秒(日)

■ 60)36秒
0.6(分)

60)24.6分
0.41(時)

24)17.41時(0.7254(日))

168	61
48	130
130	120
120	100
100	69
69	4

答 3.7254日強

(4) 次の名數を各その附記せる()の中の單位の單名數にて示せ。

- (イ) 十八里三十町四十二間(間)
- (ロ) 五里十八間一尺(尺)
- (ハ) 十九町四十五間(町)

- (二) 八里二十四町三十間三尺(里)
- (ホ) 三十一町六段四畝十七步(步)
- (ヘ) 三町二段六畝十五步(坪)
- (ト) 二畝十八步(畝)
- (チ) 三町二段三畝九步(町)
- (リ) 七日十九時二十五分(分)
- (ヌ) 二十八日九時四十五分五十五秒(秒)
- (ル) 十二時二十四分(時)
- (ヲ) 八日二十一時二十八分三十秒(日)

(5) 次の各題を諸等命法を行へ。

- (イ) 七萬二千三百六十七尺

$$\begin{array}{r} 6)72357\text{尺} \\ \underline{60)12061(\text{町})\dots\dots\text{尺}} \\ 201(\text{町})\dots\dots\text{1間} \end{array}$$

答 5里21町1間1尺

(ロ) 八・二五六里

$$\begin{array}{r} 0.256\text{里} \\ \times 36 \\ \hline 1536 \\ 768 \\ \hline 9.216(\text{町}) \end{array}$$

答 8里9町12間5尺7寸6分

八里はそのまゝにして置き、○・二五六里を町に直すために、これを三十六倍して九・二六町を得。九町を残り置き、○・二一六町を間に直すために、これを六十倍して一二・九六間を得。十二間を残り置き、○・九六間を尺に直すために、これを六倍して五・七六尺を得。由りて、八里九町十二間五尺七寸六分が所要の結果なり。

里	町	間	尺
8	18	25	5
3	4	38	2
5	27	2	4
16	49	65	6)11(1
+1	+1	+1	6
17	36)50(1	60)66(1	5
	36	60	
	14	6	

答 17里14町6間5尺

(口) 三町五段六畝十九步五町七段六畝二十九步二十一町四段十六步

町段畝	歩		
3	19		
5	29		
6	16		
2140	30)64(2		
3072	60		
+2	4		
3074			

答 30町7段4畝4歩

(ハ) 七日五時四十八分三十三秒二日四十分五十九秒十五日二十一時三十一分七秒

甲	時	分	秒
7	5	48	33
2	0	40	59
+15	21	31	7
24	26	119	60)99.1
+1	+2	+1	60
25	24)28(1	60)120(2	39
	24	120	
	4	0	

答 25日4時39秒

(8) 次の各題の和を求めよ。

- (イ) 十七日三時二十七秒三十二日十九時五十一分五十三秒四十日二十二時三十九分五十二秒十一日十八時十九分二十二秒
- (ロ) 二十一町六段八畝二十六步七合五勺四十二町三段一畝十八步五合五十五町六段八畝五步四合五勺七十四町三段八畝二十三步三合

